

見島ジーコンボ古墳群

第 152・153・155・156 号墳出土資料調査報告

見島ジーコンボ古墳群

第 152・153・155・156 号墳出土資料調査報告

二〇一三年

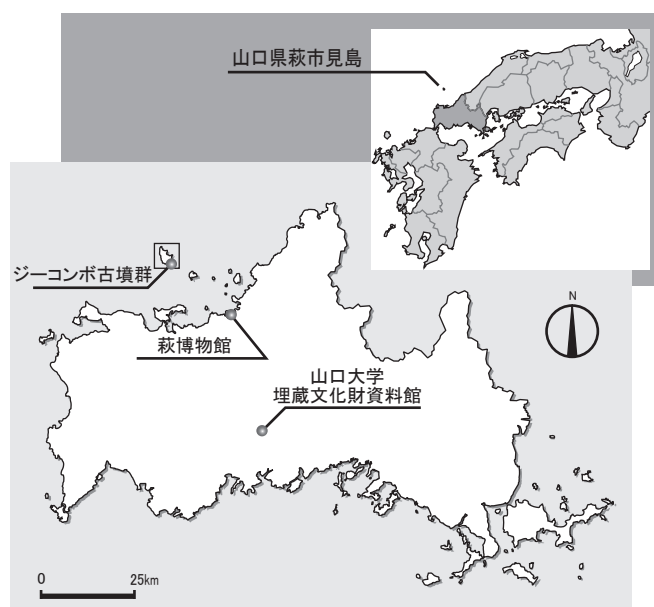
山口大学埋蔵文化財資料館

2013

山口大学埋蔵文化財資料館

見島ジーコンボ古墳群

第152・153・155・156号墳出土資料調査報告



2013

山口大学埋蔵文化財資料館

序

山口大学が所在する県内五つの地区(山口市:吉田地区・白石地区、宇部市:小串地区・常盤地区、光市:光地区)は、いずれも遺跡の上に立地しています。埋蔵文化財資料館は、本学の施設拡充等工事により遺跡が破壊される可能性が生じた場合、文化財保護のための発掘調査を実施することを主要業務としていますが、その調査・研究成果を報告書の刊行、実物資料展示など様々な方法により広く地域社会に公開することも重要な責務と考えています。

さて、当館には上記構内遺跡から出土した資料の他にも、山口県の著名遺跡から出土した資料が数多く収蔵されています。これは当館設立以前に本学教員により調査され、本学各所に収蔵されていたものを継承した資料群です。これらの資料に対し、当館は展示等で活用を図って参りましたが、平成22年度より収蔵資料の継続的な調査研究を推進するため、「館蔵資料調査研究報告書」の刊行を開始いたしました。

昨年度までに引き続き、今年度も国指定史跡『見島ジーコンボ古墳群』から出土し、当館および萩博物館に収蔵されている資料の調査報告を刊行することとなりました。見島ジーコンボ古墳群は、全国的に著名な遺跡であるにもかかわらず、調査後実に半世紀もの間、出土品の全貌が公開されませんでした。当館が収蔵する県内遺跡資料の中でも特に重要と位置づけられるものです。本書が考古学・歴史学・地域史研究等の基礎資料として活用いただければ望外の幸せです。

最後になりますが、当館の調査・研究活動にあたって、ご支援、ご協力を頂いた関係機関、関係各位に心から厚く御礼申し上げますとともに、今後とも引き続きご理解、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成25年3月

山口大学埋蔵文化財資料館長

山内 直樹

例言

1. 本書は、昭和35年(1960)から昭和37年(1962)の3ヶ年にわたり、山口県教育委員会および萩市教育委員会の合同により実施された、萩市見島に所在する「ジーコンボ古墳群」発掘調査成果の再整理調査報告である。
2. 上記の調査で出土した資料は、萩博物館（山口県萩市堀内355番地所在）と山口大学埋蔵文化財資料館（山口県山口市吉田1677-1所在）に分有保管されている。今回の調査対象墳では第155号墳出土品のみが萩博物館と山口大学埋蔵文化財資料館に分有保管されており、他は萩博物館に収蔵されている。本稿で調査を実施した第155号墳出土人骨に関しては、保管環境を考慮し萩博物館に一括保管することとなった。
3. 出土資料の確認および整理作業は、横山成己（山口大学埋蔵文化財資料館助教）、松浦暢昌（山口大学事務局情報環境部総務係教務補佐員）が担当した。
4. 出土資料の実測については、土器類の実測を横山・松浦が、金属器の実測を横山が行った。写真撮影は横山が、製図・整図は横山・松浦・乃美が行った。
5. 人骨資料については、松下孝幸氏（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム名誉館長）に鑑定を依頼し、玉稿を賜った。
6. 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の金属器類については、山口大学所蔵学術資産継承検討委員会による予算配分を受け、(株)吉田生物研究所に委託し保存処理を行った。
7. 山口大学埋蔵文化財資料館所蔵第155号墳出土金属器類のX線撮影は(株)吉田生物研究所に委託した。撮影フィルムの画像データ化に関しては、山口大学医学部附属病院放射線部の岩永秀幸副技師長に協力いただいた。
8. 銅製品の科学分析は(株)吉田生物研究所に委託した。
9. 本書の執筆と編集は横山が行った。
10. 本書を作成するにあたり、下記の方々に協力・助言を得ました。記して感謝の意を表します。
清水 満幸 松下 孝幸 吉光 紀行
萩博物館各氏 (株) 吉田生物研究所 山口大学情報環境部総務係

凡例

1. 本報告書における見島ジーコンボ古墳群の遺構番号は、『見島総合学術調査報告』(山口県教育委員会 1964)で付されたものに準拠している。
2. 見島ジーコンボ古墳群の略号を「MJ」で表記している。第152号墳は「MJ152」となる。資料の種別に関しては萩博物館所蔵品の土器類に「H」、鉄製品に「Hi」、銅製品に「Hbr」、山口大学埋蔵文化財資料館所蔵品の土器類に「Y」、鉄器類に「Yi」、銅製品に「Ybr」の略号をそれぞれ付して識別している。
3. 遺物図の縮尺については、以下のように統一している。
土器…1/2 金属器…1/2
4. 遺物の実測図は、下記のように分類した。
断面黒塗り……須恵器、磁器、金属器
断面白抜き……土師器
5. 土器の色調記号は、主として農林省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』(1976)に準拠した。

本文目次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	1
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第Ⅱ章 第152号墳の調査	4
第1節 昭和36年の現地調査	
第2節 第152号墳の出土資料	
第1項 土器類	
第2項 金属器類	
第Ⅲ章 第153号墳の調査	24
第1節 昭和36年の現地調査	
第2節 第153号墳の出土資料	
第1項 土器類	
第2項 金属器類	
第Ⅳ章 第155号墳の調査	31
第1節 昭和36年の現地調査	
第2節 第155号墳の出土資料	
第1項 土器類	
第2項 金属器類	
第Ⅴ章 第156号墳の調査	46
第1節 昭和36年の現地調査	
第2節 第156号墳の出土資料	
第1項 土器類	
第Ⅵ章 まとめ	53
付篇	
1 山口県萩市ジーコンボ古墳群第155号墳出土の人骨	55
(松下孝幸・松下真実)	
2 萩市見島ジーコンボ古墳群第155号墳出土金属製品の成分分析調査	59
(吉田生物研究所)	

挿図目次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境		第Ⅲ章 第153号墳の調査	
図1 萩市見島遺跡分布図……………3		図9 第153号墳石室実測図……………26	
第Ⅱ章 第152号墳の調査		図10 第153号墳出土土器実測図 ……28	
図2 見島ジーコンボ古墳群分布図 ……5・6		図11 第153号墳出土銅製品実測図 ……28	
図3 第152号墳石室実測図 ……9		第Ⅳ章 第155号墳の調査	
図4 第152号墳「表層採集・石室内攪乱層D-40」 「A層」出土土器実測図①……………12		図12 第155号墳石室実測図 ……33	
図5 第152号墳「表層採集・石室内攪乱層D-40」 「A層」出土土器実測図②……………13		図13 第155号墳出土土器実測図 ……35	
図6 第152号墳「表層採集・石室内攪乱層D-40」 「A層」出土土器実測図③……………14		図14 第155号墳出土銅製品実測図 ……40	
図7 第152号墳「棺外」出土土器実測図……………14		図15 第155号墳出土鉄製品実測図① ……40	
図8 第152号墳出土鉄製品実測図……………21		図16 第155号墳出土鉄製品実測図② ……41	
		第Ⅴ章 第156号墳の調査	
		図17 第156号墳石室実測図 ……49	
		図18 第156号墳出土土器実測図 ……51	

写真目次

第Ⅱ章 第152号墳の調査		写真17 第153号墳出土銅製品 ……29	
写真1 見島ジーコンボ古墳群西地区現況……………8		第Ⅳ章 第155号墳の調査	
写真2 第152号墳石室調査中 ……8		写真18 第155号墳石室全景 ……32	
写真3 第152号墳石室全景 ……8		写真19 第155号墳遺物出土状況 ……32	
写真4 第152号墳現況 ……8		写真20 第155号墳現況 ……32	
写真5 第152号墳現況 ……8		写真21 第155号墳出土土器① ……36	
写真6 第152号墳出土土器①……………15		写真22 第155号墳出土土器② ……37	
写真7 第152号墳出土土器②……………16		写真23 第155号墳出土銅製品 ……42	
写真8 第152号墳出土土器③……………17		写真24 第155号墳出土鉄製品 ……42	
写真9 第152号墳出土土器④……………18		写真25 第155号墳出土鉄製品 ……43	
写真10 第152号墳出土土器⑤ ……19		写真26 第155号墳出土鉄製品・銅製品X線画像 ……………44	
写真11 第152号墳出土土器⑥ ……20		第Ⅴ章 第156号墳の調査	
写真12 第152号墳出土鉄製品 ……21		写真27 第156号墳石室全景 ……47	
第Ⅲ章 第153号墳の調査		写真28 第156号墳遺物出土状況 ……47	
写真13 第153号墳石室全景 ……25		写真29 第156号墳現況 ……47	
写真14 第153号墳現況 ……25		写真30 第156号墳出土土器 ……52	
写真15 第153号墳出土土器① ……28			
写真16 第153号墳出土土器② ……29			

表目次

表1 第152号墳出土遺物(土器)観察表……………22	表5 第155号墳出土遺物(土器)観察表……………38
表2 第152号墳出土遺物(鉄製品)観察表……………23	表6 第155号墳出土遺物(銅製品)観察表……………45
表3 第153号墳出土遺物(土器)観察表……………30	表7 第155号墳出土遺物(鉄製品)観察表……………45
表4 第153号墳出土遺物(銅製品)観察表……………30	表8 第156号墳出土遺物(土器)観察表……………50

第1章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

萩市見島は、萩市浜崎港から北北西に約46.3km離れた日本海中に浮かぶ孤島である。島の平面形態は南を底辺とする不等辺三角形を呈し、南北約4.6km、東西約2.5km、島周約24.3kmを測り、総面積はおよそ7.8km²となる。

見島は火山島であり、地質は玄武岩類、角礫凝灰岩および海岸低地部の沖積層で構成される。島は中央部から西部にかけて高く、現在航空自衛隊見島分屯基地が置かれるイクラゲ山(標高181m)が最高峰となっている。また、瀬高と呼称される中央山地により南北が分断されており、島の南部および北東部に見られる湾入部周域には僅かながら沖積低地が形成されている。それぞれに本村・宇津の集落が発達し、現在でも島への数少ない出入口として存在する。

これら海岸域にある天然の低地には、島裾を洗う波浪から生じた岩屑が砂礫浜堤や礫浜堤を形成している。見島ジーコンボ古墳群は、島の南岸線東端の晩台山南麓から、本村港の東にある孤立丘高見山の東麓までの間に形成された、東西長約300m、幅約50m～100m、標高約7mの礫浜堤(横浦海岸)に立地している。^{註1}

第2節 歴史的環境

1. 遺跡の分布状況(図1)

見島に埋存する遺跡の様相については、ジーコンボ古墳群以外は全く明らかとなっていないと言っても過言では無かろう。現在公表されている埋蔵文化財包蔵地の分布についても、山口県教育委員会と萩市教育委員会が昭和35年(1960)から同37年(1962)まで実施した合同調査に負うところが大きい。

見島における踏査は、昭和35年合同調査の9月4日から3日間にかけて実施したとされる。『見島総合学術調査報告』では、その成果として島内の13地点が紹介されているが、現在の周知の埋蔵文化財包蔵地と照合すると、「見島小学校々庭付近の遺物包含層」「薬師堂背後の遺物包含層」「見島体育館付近の遺物散布地」が見島本村遺跡(図1の1)、「本村東区の遺物散布地と包含層」「本村部落の東部の水田」「杉山西南斜面の遺物散布地」が堅田遺跡(図1の2)、「片尻の遺物散布地」が片尻遺跡(図1の6)、「草谷の遺物散布地」が草谷遺跡(図1の7)、「船戸の遺物散布地」が船戸遺跡(図1の9)、「船見田の遺物散布地」が船見田遺跡(図1の10)、「大竹の遺物散布地」が大竹遺跡(図1の11)、「瀬田の石器発見地」が瀬田遺跡(図1の3)に該当するようである。現在の本村港と本村漁港の間にある小丘で、古く大正5年(1916)に土師器壺2点と硬玉製勾玉1点が出土したとされ、昭和35年の合同調査においても土師器壺片4点が確認された「宮崎山の遺物散布地」は、その後明確な資料の採取に恵まれなかったのか現在では包蔵地から除外されている。また、合同調査における踏査がジーコンボ古墳群発掘調査の前提としての「見島における居住の時代的上限」「古墳の築造に先行する文化の有無」「当時の地形や島の生産力」「村落の規模とその継続期間」の確認等に目的を置いていたためか、当時既にその位置が推定されていた中世の城館跡である要害山城跡(図1の4)、高見山城跡(図1の5)に関して言及されていない。また、平成元年(1989)発行の『萩市史』第2巻では、要害山城跡の北北西約1kmの丘陵上に^{註3}

土塁・石垣が見られることから、城跡の存在が指摘されている(図1の8)。

以上、見島において確認されている遺跡の分布状況を概観した。居住に適した低地が狭小である見島においては、工事中の埋蔵文化財の発見もやはり限定的な地域に限られるようであり、昭和30年以降の新知見もほぼ存しない状況と言える。

2. 見島ジーコンボ古墳群造営以前の見島

前述したように、萩市見島においてはジーコンボ古墳群以外の遺跡に未だ調査の鉾が入れられていない。そのため、各遺跡で採取された断片的な資料からジーコンボ古墳群造営以前の様相を推し量る他手段がないようである。

萩市見島発見の先史時代遺物に関しては、平成元年(1989)発行の『萩市史』に詳しい。同書によると、昭和35年(1960)より開始された合同調査の段階では、弥生時代以前に所属する遺物は同年に本村寺山南麓の宅地(図1の3)で小学生児童により発見された環状石斧の1点に限られた状態であったが、昭和45年(1970)に本村の中国電力島内発電所の増築工事にて縄文時代中期に比定される土器片が、昭和59年(1984)には見島小学校南方の水田基盤整備工事にて、遺物包含層と見られる黒褐色粘土層中から縄文時代後晩期の土器片とともに石棒片、打製石斧、石錘、そして環状石斧片などが出土したとされる。両地点とも現在の堅田遺跡(図1の2)内に位置しており、見島における人類活動が島南端の沖積低地部において開始されたことを示唆する重要な資料となっている。弥生時代の遺物については、同じく見島小学校南方水田基盤工事で確認された黒褐色粘土層中から弥生時代前・後期の土器片が出土しているが、その総量はさして多くないようである。古墳時代の遺物も、やはり堅田遺跡を中心に多数の土師器、須恵器が採集されている状況である。昭和35年調査に伴い実施された踏査で、現在見島本村遺跡と命名されている地点で確認された多数の遺物も、主として当時代に所属するものと推される。

上記の資料はいずれも正式な発掘調査を経ずしての採集品であり、遺構の確認がなされていない状況下では見島の先史時代について多くを語り得ない。現状としては、見島では古く縄文時代中期から弥生時代にかけて、本土に面する本村周辺域において少なくとも一時的な人類の上陸活動が行われ、古墳時代に至ると小規模ではあろうが同地域に集落が形成され定住生活が行われたものと推察するに止めたい。

【註】

- 1) 地理的環境は文献7による。
- 2) 文献7の400～402頁
- 3) ジーコンボ古墳群に関する最初期の報告は大正12年(1923)に三輪善之助氏によってなされている(文献16)が、その文中に「古墳」の項目で宮崎山出土遺物が紹介されている。
- 4) 合同調査前年である昭和34年(1959)に発行された『萩市誌』には、明確な位置は示されていないが城山址として高見山城跡の存在が、古城址として要害山城跡の存在が記されている。また平成元年(1989)発行の『萩市史』第2巻(文献10)では、本村北西部のみのぼし山(葦干山:標高130m)山上に土塁・石垣が構築されていることが指摘され、「みのぼし山城」の仮名が付されているが、埋蔵文化財包蔵地名としては「要害山城跡」が用いられている。
- 5) 大正15年(1926)に実施された山高郷土史研究会による見島の調査報告(文献13)には見島小学校敷地(現:見島総合センター敷地)にて採取されたとされる弥生土器が報告されており、本村宮崎山での弥生土器採取にも言及されている。同じく両地点について、昭和10年(1935)の山本博氏の報告(文献17)には土器実測図が付されているが、直ちに「弥生土器」とは判じがたいものであり、現在資料の所在も不明確であることから『萩市史』では確実な資料として認めていない。



国指定 史跡 見島ジーコンボ古墳群

- 1 見島本村遺跡 集落跡（縄文～中世）
- 2 堅田遺跡 散布地（縄文～古代）
- 3 瀬田遺跡 散布地（弥生）
- 4 要害山城跡 城館跡（中世）
- 5 高見山城跡 城館跡（中世）
- 6 片尻遺跡 散布地

- 7 草谷遺跡 散布地
- 8 要害山城跡 城館跡（中世）
- 9 船戸遺跡 散布地
- 10 船見田遺跡 散布地
- 11 大竹遺跡 散布地

萩市(1971)『萩市地形図7』（国土座標第Ⅲ系）を転載・加筆

図1 萩市見島遺跡分布図

第II章 第152号墳の調査

第1節 昭和36年の現地調査

昭和35年(1960)から3ヶ年にわたり実施された見島ジーコンボ古墳群学術発掘調査において、第1年度は分布調査に当てられ、第152号墳は第2年度である昭和36年(1961)に調査の手が加えられている。萩博物館所蔵資料に同封された注記カードには全て「19610901」の書き込みが見られるが、調査は9月1日の1日限りで実施されたのであろうか。

第152号墳が位置する西部域の各石室は、『見島総合学術調査報告』においてB式、つまり「石塊や割石を一重にならべて箱形にくんだもので、一見組合せ式の箱形石棺に近い形をしめしている」ものに分類されるが、東～中部域に比すとその分布は密とは言い難い(図2)。その一方で第145～153号、番外7・10号の11基^{註1}、第154～157号、番外4～6号の7基がそれぞれ支群を形成しているかのようにも見える。仮に前者を西部域E支群、後者を西部域W支群と呼称すると、平成22年度に報告した第154号墳^{註2}と本書で報告する第155・156号墳はW支群に、平成23年度に報告した第151号墳^{註3}と本書で報告する第152・153号墳はE支群に含まれる。

現在まで遺構実測原図や調査日誌等当時の調査記録が発見されていないため、『見島総合学術調査報告』に記載された第152号墳の調査成果報告文を転載すると同時に、山口大学埋蔵文化財資料館に保管されている「第30図 第152号墳石室実測図」トレース原図の再トレース図(図3)を掲載する。

第152号墳 第151号墳の西方約15メートルの地点にあって、浜堤の頂上部に位置している。かつて盗掘されたらしく側石3個が内側に傾き、石室の外にも須恵器が散在し、天井石はすべて取り除かれていた。

石室の内部につまっていた礫や石塊の中に、須恵器や土師器の破片が混っていたが、その状態は明らかに後世混り込んだことを示し、床面も攪乱され、ほとんどもとの状態を止めていない。奥石は1箇の自然石を縦に用い、比較的偏平な自然石を縦に並べて両側壁をつくり、築成当時西南方の入口に小石塊を盛ってふさいであったと思われるが、調査の際には残っていなかった。

石室の方位はS20°Wで、奥行327センチ内外、幅63～72センチでかなり広い方であるが、高さが低く平均53センチぐらいである。床面は側石の上縁まで浜堤を掘り下げ、砂利を敷いてあったようであるが、後世攪乱したためか、今日ではほとんど残っていない(第30—31, 図版25—1)。

人骨は全く遺存せず、二次的に堆積した石室内部の礫に混って、器形不明の鉄製品の小断片少量と、鉄鏃の柄部や刀子状の鉄器の断片各1箇のほか、須恵器の埴、盃、高坏の破片や、土師器の坏や盃の破片を若干検出した。なおこの石室から採集した須恵器の破片は103片、土師器の破片36片、瓦器破片4片で、ここでは須恵器の量が著しく多い。なお調査終了後、側石を復原しておいた。

遺物として、鉄製刀子片その他鉄鏃残欠及び須恵器埴、盃、高坏破片、土師器の坏、盃その他の破片が若干発見された。刀子も鏃も小片で全体の形制は明かでない。

須恵器破片103片、土師器片若干が石室外、石室内の流土中に出土した。床面から確実に出たとすべきである。須恵器は、内外面平行条の例、外面擦痕内面青海波の例がすべてである。口縁部片(第27図—6)は1片出たのみである。薄手のものは被せ式蓋、へら起こし平底および付け高台のある坏の破片がすべてである。

土師器は破片からみると、坏や埴形のものなどがあつたと思われる。(『見島総合学術調査報告』430-431頁)

- 昭和36年(1961)・昭和37年(1962)調査墳
- 昭和57年(1982)調査墳
- 出土資料調査報告既刊の調査墳※昭和36年調査
- 本書の調査対象墳 ※昭和36年調査



図2 見島ジーコンボ古墳群分布図

記述によると本墳は浜堤の頂上部に位置するとある。現在見島ジーコンボ古墳群西部域は史跡公園として整備されており(写真1)、草木で覆われているため現況地表の観察は困難であるものの、浜堤の緩やかな高まりを感じることは可能である。西部域の各墳墓に関しては、第151～154号墳が浜堤のほぼ頂部に、第155・156号は北側傾斜地に立地しているものと思われる。

調査時の写真(写真2)と実測図(図3)を見ると、石室は奥壁1石で構築され、右側壁は4石、左側壁は5石が遺存している。閉塞部はすでに攪乱を受けた状態であったようだが、第151号・第154号の両墳が西南西に開口するのに対し、本墳は南南西に開口している。床面も攪乱され、ほぼもとの状態を止めていないとされるが、図示された礫床を見ると第151号墳に比しやや大ぶりの礫が用いられているようであり、第154号墳の礫床に近い。石室規模に関しては、奥行き327cm内外、幅63～72cm、高さ平均53cmと記されている。実測図で確認すると奥行き(全長)と高さはほぼ近似値を示しているが、幅は60cm～82cm程度であり、多少の誤差が生じている。

本墳で注意すべきは「側石3個が内側に傾き」「調査終了後、側石を復元しておいた」という記述と、「発掘調査の途中」とされる写真2、そして調査終了時のものと見られる写真3である。写真2は報告書に付されたキャプションと写真中に映り込む巻き尺と見られる紐の存在から、第152号墳に調査の手が加えられた昭和36年(1961)9月1日前後の写真と想像したくなるが、奥壁には存在すべき「152」の数字が見当たらない。各石室にペンキで番号が付されたのは昭和35年(1960)とされるため、この写真は調査初年度に当たる昭和35年に実施された分布図作成に伴う作業を撮影したものと推察される。さらに写真2には左側壁第3石に見られるように内傾した側石が確認されるが、写真3には内傾した側石が確認されず、実測図に描かれた側石もほぼ直立状態にある。以上から調査工程を復元すると、①【昭和35年】石室輪郭の確認・分布図作成 ②【昭和36年9月1日】石室内埋土の掘削 ③【昭和36年9月1日以降】石室の再構築、平面・立面図作成、写真撮影 の順に作業が実施されたものと思われる。

次に遺物に関する記述を確認すると、人骨は全く遺存せず、石室内部に二次堆積した礫中から少量の鉄製品と須恵器・土師器が出土したとされる。床面からの出土は見られなかったようであり、石室実測図にも遺物に関する情報は描き込まれていない。ただし報告書には「須恵器103片、土師器片若干が石室外、石室内の流土中に出土した。床面から確実に出たとすべきである。(下線筆者)」との記述がある。一読では理解に苦しむが、ここでは「これらの遺物が元来床面に存在していたことは確実である」との意と捉えておく。また、須恵器は内外面平行条の例、外面擦痕内面青海波の例が全てで、口縁部片は1片出土したのみ(本書図4のH4)とされるが、現存する資料はこれを否定する内容であった。

以上、『見島総合学術調査報告』に記載された第152号墳の調査成果を確認した。次節より現存が確認された出土資料を報告する。

【註】

- 1) 文献7の「第39図 見島古墳群の分布図Ⅱ」を見ると、第147号墳の南に近接して石室状の書き込みが見られる。これが主体部であれば12基ということになる。
- 2) 文献18
- 3) 文献19
- 4) 「第1年次の基本的調査は100分の1の古墳分布図を作るとともに、各古墳に番号をつけこれを東南端の晩台山の方から数えてすべて174基を明かにし、各古墳にはペンキで番号をつけ図面と対照させるとともに将来の保存にも資すことにした」(文献7 388頁27～29行)



写真1 見島ジーコンボ古墳群西地区現況※2012年12月(東から)



写真2 第152号墳石室調査中(南から)
※文献7「433頁 第31図 第152号墳発掘途中の状況」を転載



写真3 第152号墳石室全景(南西から)
※文献7「図版25 第152号墳石室」を転載



写真4 第152号墳現況※2012年12月(南から)



写真5 第152号墳現況※2012年12月(南西から)

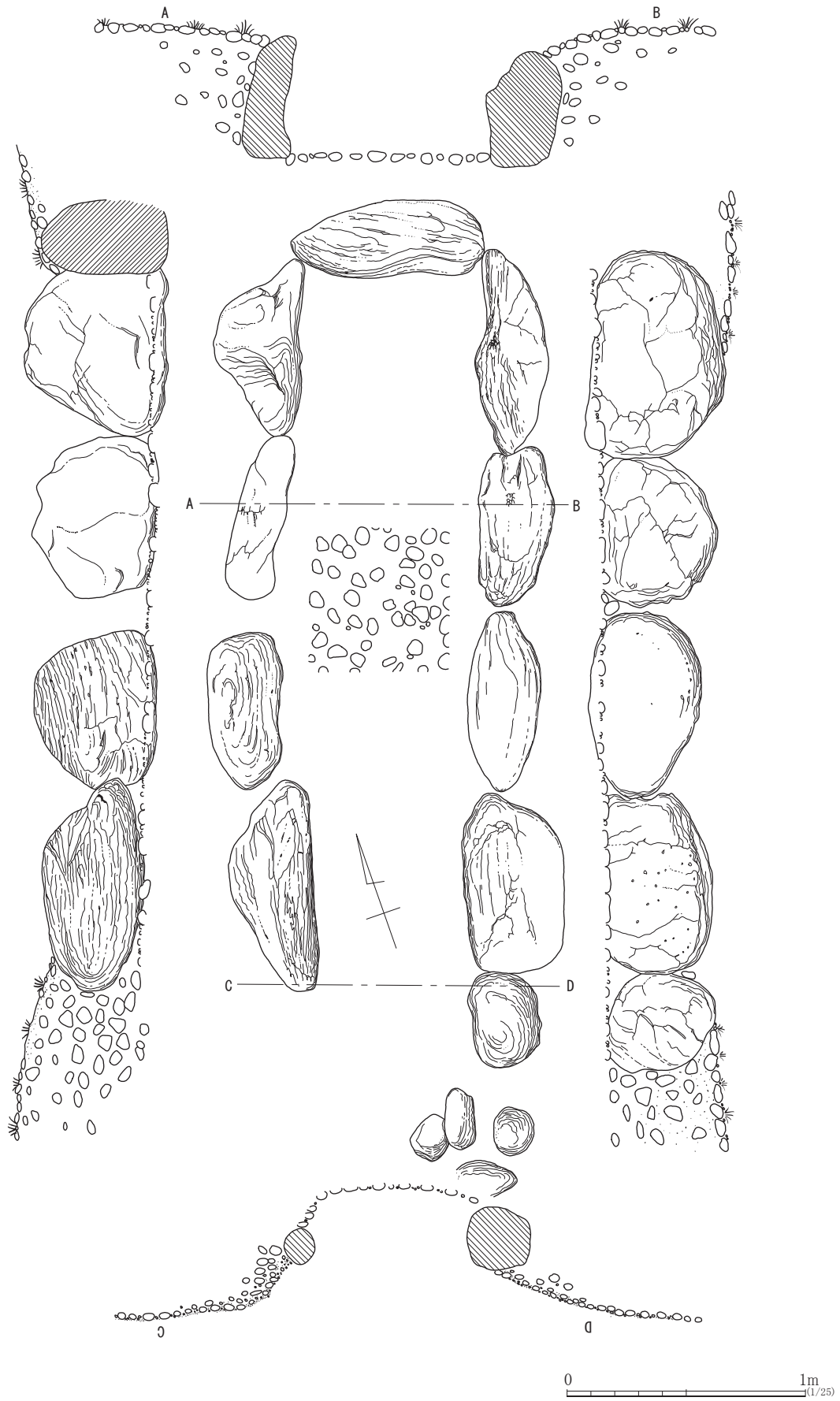


図3 第152号墳石室実測図

第2節 第152号墳の出土資料

第1項 土器類

第152号墳出土土器類は、萩博物館に一括して収蔵されている。萩博物館所蔵資料に付された注記カードには、「19610901」という共通した日付とともに、遺構・層位として「152号 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm」「152号 棺外 攪乱土層 西側」「152号 棺外 東側」という3種の情報が記載されている。報告書と対照すると、前者を「石室内流土出土」、後2者を「石室外流土出土」資料と見て間違いなからう。本稿ではひとまず両者を分けて報告を行いたい。

【石室内出土】

1. 須恵器(図4～6、写真6～9、表1)

須恵器には蓋坏、壺・甕類が存在する。以下に概要を記す。

H1は坏蓋。3/4を欠失するが、天井部中央付近の遺存状況から見てつまみの無い蓋である可能性が高い。復元口径は13.1cmと小ぶりであり、器高も低い。口縁部は鳥嘴状に下垂させるが、端部は丸く収める。天井部から口縁部にかけて被る自然釉と灰から、重ね焼かれた状況が窺える。H2は坏の高台小片か。貼り付け面で剥離しており、第152号墳出土須恵器の中では精緻な胎土が用いられている。端部外面を欠失しているが、以外は丸く収めるため環状つまみの破片である可能性を残す。H3は坏の体部～口縁部片か。復元口径は11.8cmであり、H1とセット関係をなす可能性がある。内外面とも丁寧な回転ナデ調整が施されており、口縁はわずかに外反させ、端部を丸く収めている。口縁の特徴から長頸壺等の口縁である可能性もある。H4は第152号墳出土資料として唯一『見島総合学術調査報告』に掲載された壺類の口縁部片である。口縁は緩やかに外反し、端部外面を肥厚させ沈線を1条巡らせている。この1点のみ資料に「A層」の注記が見られるが、これが何を示すのか不明である。H5は長頸壺。頸部と肩部の破片であるが、胎土や焼成状態等から同一個体と判断した。算盤球状に肩の張る体部を有する個体と見られる。頸部・体部とも外面には自然釉と灰が被り、器面調整は不明である。内面は回転ナデ調整を施している。H6は壺類の底一体部片。こちらも接合しないが、胎土や器面調整方法から同一個体と判断した。底部外端に高台が付されるが、端部が欠失している。外面体部下位より腹部まで回転ヘラ削り、体部上位と内面は回転ナデ調整が施される。当資料では「151号 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm」「151号 棺外 攪乱土層 西側」の2片が接合している。H7は壺類底部片。復元径9.6cmの平底の底部から強く屈曲し体部に立ち上がる。内外面とも灰が被り調整が不明瞭である。H8も壺類の底部片か。復元径8.2cmとやや小ぶりであり、内面には灰が被る。同一個体と見られる破片が他に1片存在する。H9は甕口縁部片。緩やかに外反する口縁であり、端部外面を肥厚させ下端に凸帯を設けている。内外面とも自然釉を被る。H10も甕口縁部片。H9に比して口縁外端部のナデが弱く、下端の凸帯が不明瞭である。焼成時の状態によるものか、全面に灰緑色の自然釉を被るが、口縁端部外面上位のみ被っていない。この他に、「151号 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm」資料中には約50点の須恵器甕体部片が存在する。ここではその内12点(H11～H22)を図示する。外面は自然釉を被り調整痕が不明瞭のことが多い。観察できるものの多くは平行叩きおよびカキ目調整が施されているが、同一個体と見られるH14・H15・H18・H22など格子叩きも見られる。内面は同心円、平行当て具の両者が見られ、上記の破片に「同心円のみ」「同心円+平行」「平行のみ」の当て具痕が見られることから、甕の部位により当て具を代えていることが分かる。またH17には車輪文当て具痕が見られることに注意しておきたい。

2. 土師器(図6、写真10、表1)

『見島総合学術調査報告』に記されているように、確認された土師器は極めて少量であり、完形に復元できる資料も存在しない。

H23は復元口径18.5cmとなる広口の浅い坏である。底部を欠失しているが、体部から緩やかに内湾して立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸く収めている。体部外面は手持ちへら削り後ミガキ、内面は風化で不明瞭であるが部分的にミガキが見られる。外面と口縁内面に赤色塗彩が残る。H24は平底の底部から屈曲気味に体部が立ち上がり、口縁をわずかに外反させる坏である。内外面ともに風化が激しく調整痕は不明瞭であるが、外面には部分的に手持ちへら削り、ミガキが見られる。口径は15cm内外になるものと思われる。H25は器壁が薄く、体部の立ち上がりも低いがここでは坏と見なしておく。内湾する体部から口縁を強めに外反させる個体であり、内面には放射状の暗文が施されており、外面には赤色塗彩が残る。図化した小片は底部を欠いているが、同一個体と思われる他の底部片には高台が剥離した痕跡が見られる。H26は高台片。底部との接合面で剥離したもので、径は10cm内外と見られる。内外面ともに丁寧なナデが施されており、胎土や焼成状態の類似からH25の高台である可能性がある。

【石室外出土】(図7、写真11、表1)

資料数はごく少量であり、図化可能な資料も須恵器3点、土師器2点のみである。

H27は須恵器口縁部片。器壁が厚く、壺や瓶類の口縁と見られる。内外面とも回転ナデ調整が施され、内面には少量ではあるが灰が被っている。H28は須恵器坏底部片。底部外端に低い高台が「ハ」字状に外傾させて貼り付けられる。高台の内面および端部は強くナデが施されており、突起した内端部で接地する。H29も須恵器坏底部片。H28に比して厚い器壁の個体であり、底部外端に断面方形の小ぶりの高台が貼り付けられる。高台は端部のほぼ全面で接地する。H30は土師器坏の体部片。底部と口縁部を欠失している。外面底部付近には回転へら削りが施され、外面体部および内面は回転ナデ調整が行われており、他の土師器坏とは成形技法において大きく異なる資料である。H31は土師器の高台片。底部との接合面で剥離しており、復元径は外径で12.0cmを測る。丁寧なつくりであり、面取りされた端部全面でしっかりと接地する。内外面および端部に赤色塗彩が施されている。第152号墳出土資料中には確実に接合する底部片が存在しないが、胎土および焼成状況の類似からH23が同一個体である可能性を残す。

以上が第152号墳出土土器資料の概要である。『見島総合学術調査報告』に記されているように、後世の攪乱が激しかったようで、既往報告した第151号墳、第154号墳に比して土器の遺存状態が著しく悪く、完形復元できる資料は存在しない。さらに第153号墳と近接するため、これらの資料が全て第152号墳に帰属するかは断定できない状況にあるが、同じく激しく攪乱を受けていた第153号墳出土土器と同一個体と目される資料も存在しないこと、そして石室内出土土器と石室外出土土器の接合例も存在することから、ひとまずは当資料群を第152号墳出土品として報告しておく。

第151号墳に続き、第152号墳からも須恵器甕体部の小片が多数出土している。現存する奥壁・側壁上に直接天井石を架構した場合、大型甕を完形で納入できる空間的余裕はないことから、ここでも第151号墳同様に破碎甕の供献が行われた可能性を指摘しておきたい。また今回の調査対象墳で須恵器甕の多量出土が確認されたのは本墳のみであることも特に附記しておく。

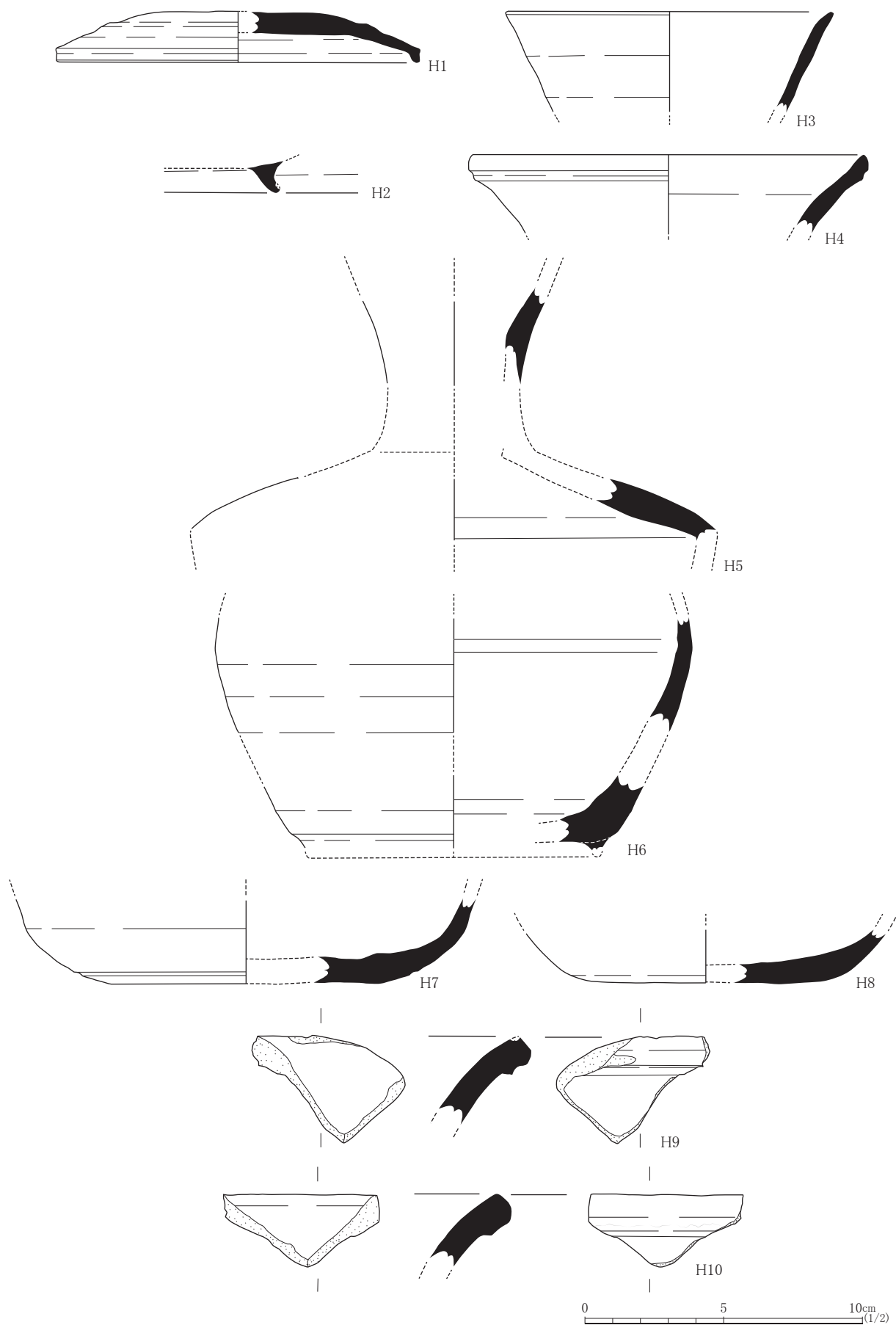


図4 第152号墳「表層採集・石室内攪乱層D-40」「A層」出土土器実測図①

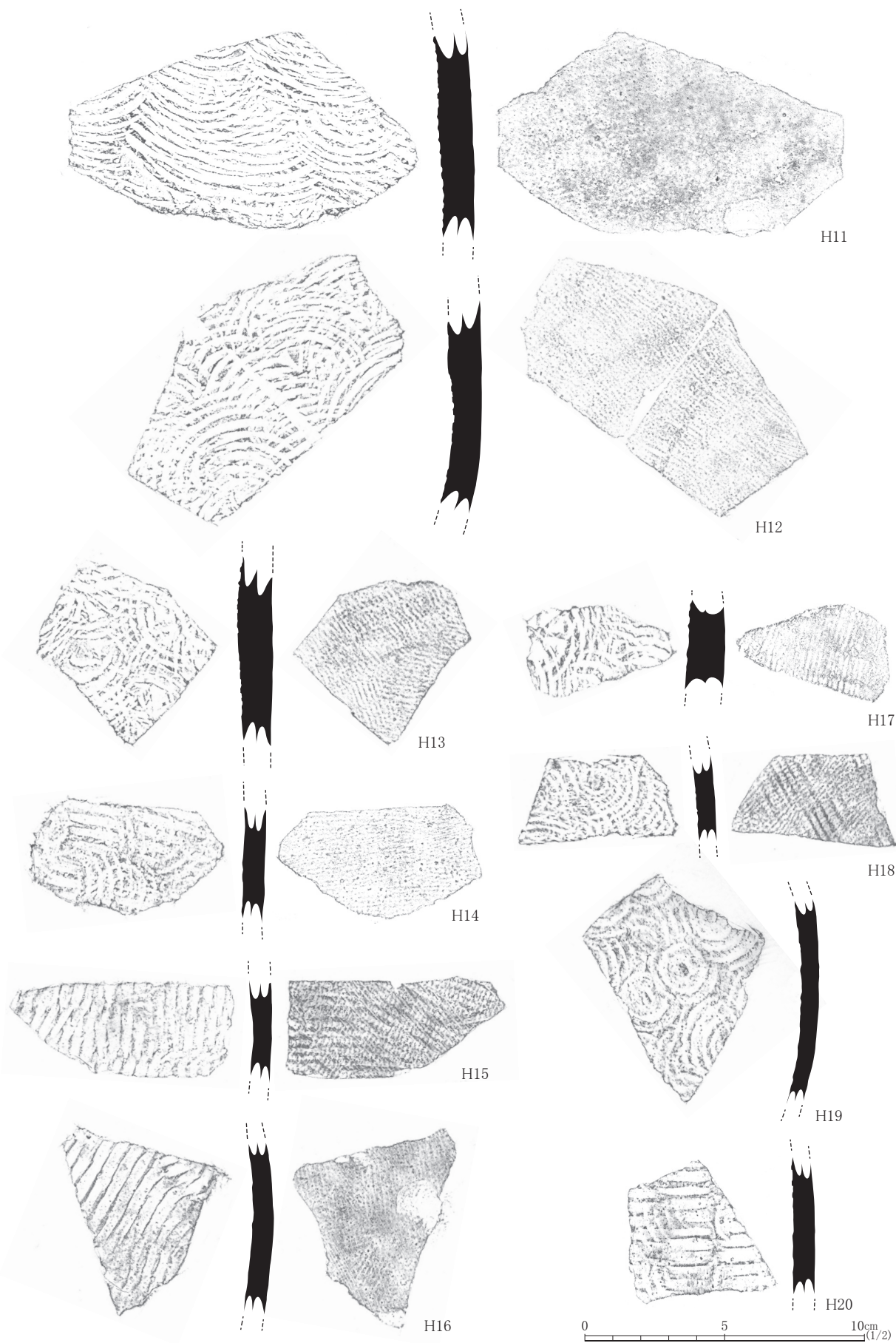


图5 第152号墳「表層採集・石室内攪乱層D-40」 「A層」出土土器実測図②

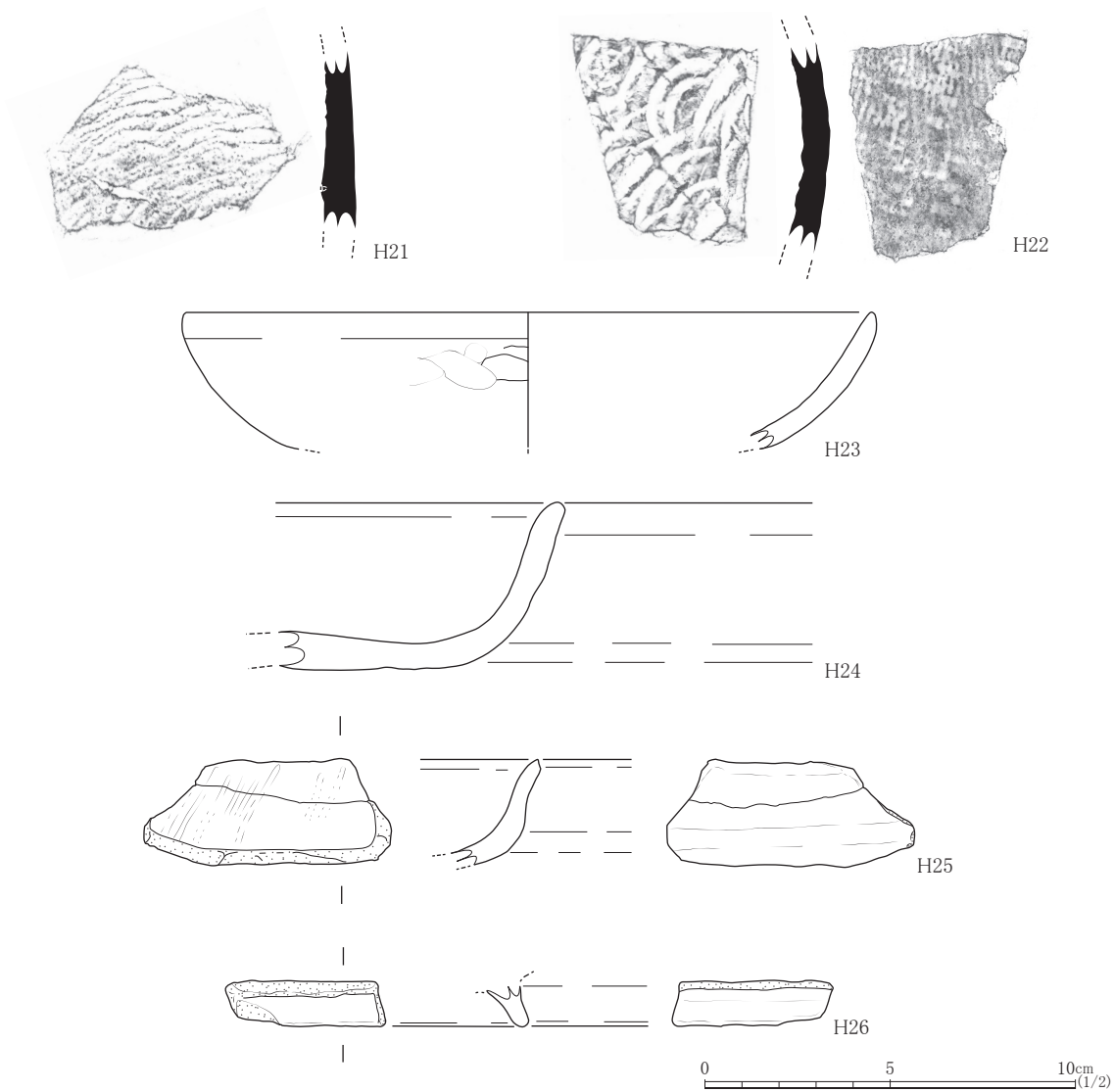


図6 第152号墳「表層採集・石室内攪乱層D-40」「A層」出土土器実測図③

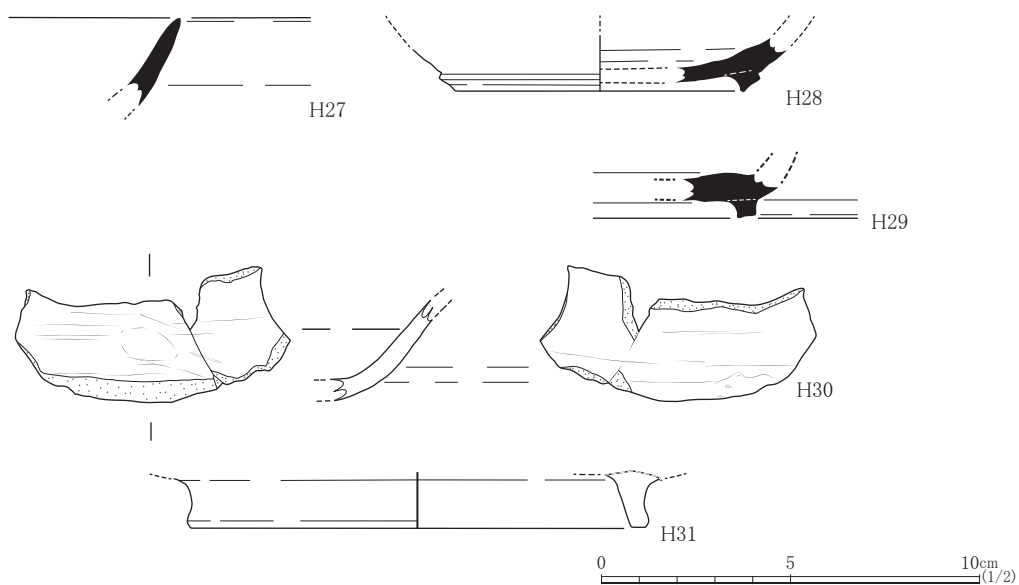


図7 第152号墳「棺外」出土土器実測図



写真6 第152号墳出土土器①



写真7 第152号墳出土土器②

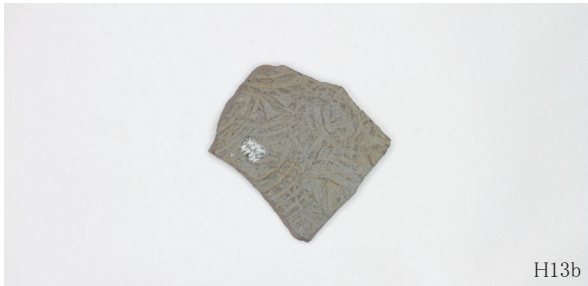
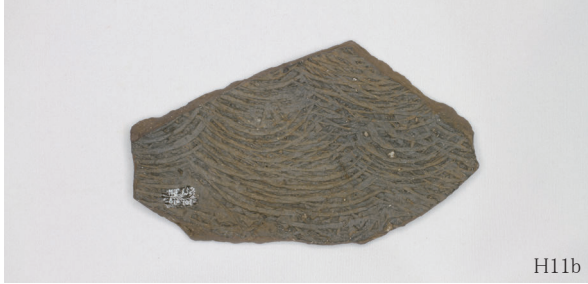


写真8 第152号墳出土土器③



H17a



H18a



H17b



H18b



H19a



H20a



H19b



H20b



H21a



H22a



H21b



H22b

写真9 第152号墳出土土器④



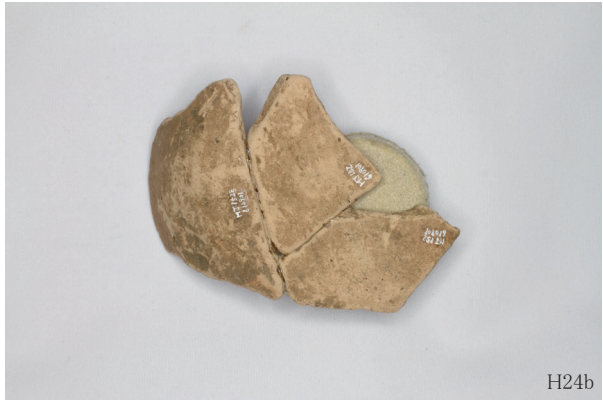
H23a



H23b



H24a



H24b



H25a



H25b



H26a



H26b

写真10 第152号墳出土土器⑤



H27



H28



H29



H30a



H30b



H31a



H31b

写真 11 第152号墳出土土器⑥

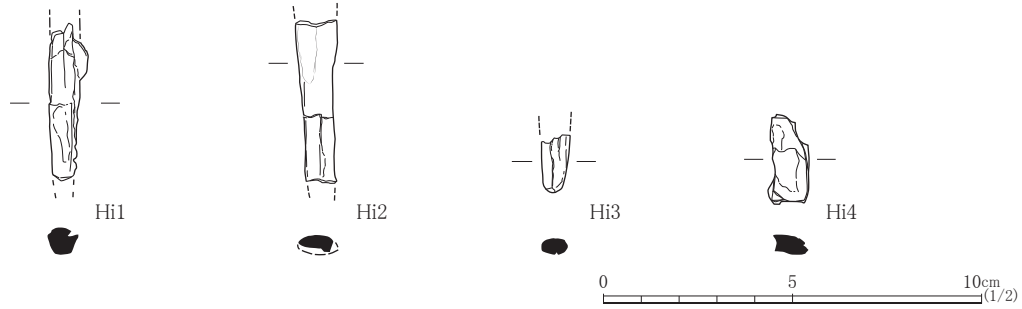


図8 第152号墳出土鉄製品実測図



写真12 第152号墳出土鉄製品

第2項 金属器類

金属器類も萩博物館にのみ収蔵されている。『見島総合学術調査報告』では「器形不明の鉄製品の
小断片少量と、鉄鏃の柄部や刀子状の鉄器断片各1箇」という一文が見られるが、今回の調査で確認で
きたのも鉄製品4点のみであり、報告書の記述を裏付ける内容となっている。

1. 鉄製品 (図8・写真12・表2)

Hi1は断面六角形状の棒状製品で鉄鏃の茎部と見られる。残長42mm、最大幅8mmを測る。報告書に記
される「鉄鏃の柄部」に該当する資料であろう。Hi2は2片に折損しているが接合可能な資料である。片
面が大きく剥離しているが、断面凸レンズまたは楕円形の棒状製品と見られる。刀子の茎部か。残長43
mm、最大幅11mmを測る。報告書に記される「刀子状の鉄器断片」に該当する資料と見られる。Hi3は断面
楕円形の棒状製品端部片である。接合はしないがHi2と同一個体で刀子の茎端部の可能性がある。残
長15mm、最大幅7.5mm、厚さ5mm。Hi4は板状製品で原面が全く遺存していない。残長23mm、最大幅10
mm、厚さ5mmを測る。

第152号墳では、第151号墳・第154号墳同様に鉄鏃など鉄製武器類と刀子など鉄製工具類が副葬さ
れた痕跡は見られるが、土器類同様に石室床面が攪乱を受けていたためか鉄製品の遺存状況も断片
的である。これを執拗な盗掘の結果と見なすか、本来的な副葬量の結果と見なすかで当墳の評価は大
きく異なったものになるだろうが、他墳における鉄製品の遺存状況を見ると、仮に多量副葬が行われていた
場合、盗掘者が鉄細片まで徹底的な回収を目指したとは考えがたい。当墳における須恵器甕小片の遺
存状況が如く、一定量の鉄片が石室内または棺外に取り残される可能性が高いのではなかろうか。埋葬
施設における遺物の総量は追葬回数に左右されることも考慮した上で、なおも当墳では鉄製品の副葬
が少量であったものと推測される。

表1 第152号墳出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値 △は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm)		色調		胎土	焼成	備考
				①口径②底径③器高	①外面 ②内面					
H1	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 坏蓋	口縁部 ~天井部	①(13.1) ③△1.85	①灰色(N5/) ②灰色(5Y6/1)	密	良好	扁平な坏蓋であり、口縁端部を鳥嘴状に下垂させる。天井遺存部から無つまみの蓋である可能性が高い。口縁外面に被る灰は重ね焼かれた状況を示す。		
H2	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 高台付坏身	高台	③△1.1	①オリーブ灰色(5Y6/2)	密	良好	接合部で剥離。端部外面を欠失する。内外面とも丁寧なコシナデが施される。輪状つまみ片の可能性も有する。		
H3	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 坏身	口縁部 ~体部	①(11.8) ③△2.8	①②灰白色(N7/)	密	良好	口縁部をわずかに外反させる。端部は丸く収める。内外面とも丁寧な回転ナデ調整が施される。壺口縁部の可能性も有する。		
H4	第151号墳 A層	須恵器 長頸壺か	口縁部	①(14.2) ③△2.8	①暗灰色(N3/) ②暗灰黄色(2.5Y5/2)	密	良好	『見島総合学術調査報告』第27図の6(428頁)に該当。口縁外面を肥厚させ、下端に沈線を施す。内面に自然釉がかかる。		
H5	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 長頸壺	口縁部 体部		①黄灰色(2.5Y6/1) 自然釉 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) ②灰色(5Y6/1)	密	良好	胎土および焼成状況より頸部・体部上半が同一個体と判断。外面・頸部内面に灰・自然釉がかかる。		
H6	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 壺類	体部 底部	体部径(17.2) 底部径(11.8)	①灰色(N7/) ②明緑灰色(7.5GY7/1)	密	やや不良	「MJ152号 棺外 攪乱土層 西側」注記破片と接合。胎土・色調・調整より同一個体と判断。高台端部欠失。体部下位はへら削り、上位は回転ナデが施される。内面は回転ナデ。		
H7	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 壺類	体部 ~底部	②(9.6) ③△3.0	①②褐灰色(10YR6/1) 灰被り部 灰白色(10YR8/1)	密	やや不良	内外面とも灰が被り調整不明瞭。底部内面は火膨れする。		
H8	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 壺類か	体部 ~底部	②(8.2) ③△1.9	①灰白色(2.5Y7/1) ②灰白色(2.5Y8/1)	密	良好	底部外面はへら起こし後指ナデ。体部外面は回転ナデ。内面は灰が被るため調整不明。		
H9	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 甕	口縁部	③△3.2	①②黒色(N2/) 内面自然釉 灰オリーブ色(7.5Y6/2)	密	良好	口縁端部を外方に肥厚させ、下位に断面三角形の凸帯を設ける。端部上面はナデにより面をとる。口縁外面は横ナデ、内面は斜め方向のナデが施される。		
H10	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 甕	口縁部	③△2.55	①灰色(5Y5/1) 外面自然釉 灰白色(5Y7/2) ②暗灰色(N3/)	密	良好	口縁端部を外方に肥厚させ、肥厚部を横ナデすることにより凹面を形成する。口縁外面には自然釉がかかる。		
H11	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①灰オリーブ色(5Y5/2) ②灰色(N5/)	やや密	良好	外面は自然釉がかかるため不明瞭であるが、平行叩き痕が観察される。内面は同心円当てで具痕が明瞭に残る。		
H12	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①黒色~オリーブ黒色 (7.5Y2/1~3/1) ②灰色(7.5Y4・5/1)	やや密	良好	外面は自然釉が薄くかかるため不明瞭であるが、平行叩き痕が観察される。内面は同心円当てで具痕が明瞭に残る。		
H13	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①黒色~暗灰色 (N2/~3/) ②灰色(5Y5/1)	やや密	良好	外面は平行叩き痕が、内面は同心円当てで具痕が明瞭に残る。		
H14	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①黒色~暗灰色 (N2/~3/) ②灰色(N4・5/)	やや密	良好	外面にはカキ目、内面には平行・同心円当てで具痕が残る。		
H15	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①暗灰色(N3/) ②灰黄色~暗灰黄色 (2.5Y5/1・2)	やや密	良好	外面には格子叩き痕、内面には平行当てで具痕が残る。		
H16	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部		①青黒色(5B1.7/1) ②オリーブ黒色(5Y3/1)	やや密	良好	外面には平行叩き後カキ目が施される。内面には平行当てで具痕が残る。		

第II章 第152号墳の調査

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量 (cm)		色調		胎土	焼成	備考
				①口径②底径③器高	④	①外面 ②内面				
H17	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部				①暗灰色(N3/) ②灰色(N6/)	密	良好	外面には平行叩き痕が、内面には同心円当て具痕とともに車輪文当て具痕が残る。
H18	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部				①黒色(7.5Y2/1) 外面自然釉 灰オリーブ色(5Y5/3) ②灰オリーブ色(5Y5/2)	やや密	良好	外面に自然釉がかかるが格子叩き痕・カキ目が観察される。内面には同心円当て具痕が残る。
H19	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部				①オリーブ黒色～黒色 (5Y3/1～2/1) ②灰色(N4/)	やや密	良好	外面には自然釉がかかり、調整が確認できない。内面には同心円当て具痕が残る。
H20	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部				①紫黒色(5P1.7/1) 外面自然釉 灰オリーブ色(10Y5/2) 灰色(10Y8/1) ②灰色(N4・5/)	やや密	良好	外面は自然釉に覆われ、調整は観察不能。内面は平行当て具痕が残るが、部分的に同心円当て具痕も見られる。
H21	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部				①青黒色(10BG1.7/1) 外面自然釉 灰オリーブ色(7.5Y4/2) ②灰色(N4・5/)	やや密	良好	外面は自然釉に覆われ、調整は観察不能。内面は同心円当て具痕が残るが、部分的にナデが施される。
H22	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	須恵器 甕	体部				外面自然釉 オリーブ黒色(5Y2/2) 灰オリーブ～暗オリーブ (5Y4/2～3) ②灰黄色(2.5Y7/2)	密	良好	外面は自然釉に覆われるが、格子叩き痕が観察される。内面には放射線状に直線が走る同心円当て具痕が見られる。
H23	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	土師器 坏	口縁部 ～体部		①(18.5) ③△3.7		①明赤褐色(5YR5/6) 顔料 赤褐色(2.5YR4/6) ②明褐色～橙色 (7.5YR5.5/6)	やや粗	やや軟	体部から緩やかに内湾し口縁に至る。口縁端部は尖り気味に丸く収める。外面は削り後ミガキ。内面は摩耗が激しいが同様の調整が施されているようである。外面及び内面の口縁付近に赤色顔料が残る。
H24	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	土師器 坏	口縁部 ～底部		③△4.5		①にぶい 橙色～浅黄褐色 (10YR7/3～8/3) ②にぶい 橙色～浅黄褐色 (7.5YR7/4～8/4 10YR8/3)	やや粗	やや軟	平底の底部から屈曲し直線的に立ち上がる坏。口縁は弱く外反し、端部を丸く収める。器壁の厚い個体。内外面とも風化が著しいが、底部外面はミガキ、体部にも一部ミガキが見られる。
H25	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	土師器 坏	口縁部 ～体部		③△2.8		①明赤褐色～橙色 (5YR5/6～6/6) ②にぶい 黄褐色(10YR7/4) 顔料 赤褐色(5YR4/6)	粗	やや軟	底部から短く立ち上がり外反して口縁に至る。口縁端部は摩滅しているが丸く収めるものと思われる。底部外面はヘラ削り後ミガキが施される。内面には放射線状の暗文が残る。赤色顔料は外面上位・内面暗文部分にのみ遺存する。同一個体と見られる別破片には高台が剥離した痕跡が見られる。
H26	第152号墳 表層採集 石室内 攪乱層 D-40cm	土師器 高台	高台		③△1.2		①にぶい 黄褐色(10YR7/4) ②明赤褐色(5YR5/6)	やや粗	やや軟	底部と剥離した高台片。ハ字状に外方に張り出し接地する。H25と同一個体か。
H27	第151号墳 棺外 攪乱土層 西側	須恵器 壺・瓶類か	口縁部		③△2.35		①②黄灰色(2.5Y6/1)	密	良好	外方に直線的に開く口縁部片。器壁の厚みから、壺・瓶類の口縁部と思われる。内面には灰が被る。
H28	第151号墳 棺外 攪乱土層 西側	須恵器 高台付坏身	底部	高台径 外端(8.5) 内端(7.5) ③△1.4			①②灰色(7.5Y6/1)	密	良好	幅広の低い高台が底部外端に付く。高台は内端部で接地する。体部は開き気味に立ち上がるものと思われる。
H29	第151号墳 棺外東側	須恵器 高台付坏身	底部	③△1.2			①②黄灰色(2.5Y4/1)	密	良好	断面方形の小ぶりな高台が底部外端に付く。高台端部のほぼ全面で接地する。
H30	第151号墳 棺外東側	土師器 坏か	体部 ～底部	③△3.5			①暗灰黄色(2.5Y4/2) ②暗灰黄色～灰黄色 (2.5Y4/2～4/1)	やや粗	やや良好	緩く内湾する体部片。口縁は欠失しているがわずかに外反するものと思われる。内外面とも横ナデ調整が施される。
H31	第151号墳 棺外東側	土師器 高台	高台	高台外径(12.0) ③△1.5			①②橙色(7.5YR6/6) 顔料 赤色(10Y5/6)	密	良好	底部付着面で剥離した高台片。丁寧なつくりであり、内外面・端部にまで赤色塗彩が施される。

表2 第152号墳出土遺物(鉄製品) 観察表

法量は残存最大値 ()は復元値 ▲は他と合計

遺物番号	遺構・層位	種類	部位	法量				備考
				①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	
Hi 1	第151号墳 石室内攪乱層中 出土地点不明	鉄鏃	茎部片	①42 ②8 ④4.88				片側面が大きく 鏃割れ
Hi 2	第151号墳 石室内攪乱層 表層採集0～40cm	刀子	刀身～茎部片	①43 ②11 ④3.94				基部断面凸レンズ状。2片が接合。
Hi 3	第151号墳 石室内攪乱層 表層採集0～40cm	刀子	茎端部	①15 ②7.5 ③5 ④1.16				Hi2と同一個体か(接合せず)
Hi 4	第151号墳 石室内攪乱層 表層採集0～40cm	不明	不明	①23 ②10 ③5 ④2.28				原面遺存せず

第III章 第153号墳の調査

第1節 昭和36年の現地調査

第153号墳も見島ジーコンボ古墳群学術発掘調査第2年度である昭和36年(1961)に調査の手が加えられている。萩博物館所蔵資料に同封された注記カードには「19610903」の以外の年月日が認められないが、調査は9月3日の1日限りで実施されたのであろうか。

ここでも『見島総合学術調査報告』に記載された第153号墳の調査成果報告文を転載すると同時に、山口大学埋蔵文化財資料館に保管されている「第33図 第153号墳石室実測図」トレース原図の再トレース図(図9)を掲載する。

第153号墳 第152号墳の西約4メートルの地点にある簡素な石室で、これも盗掘された形跡がある。

天井石は1箇石室の内側に転落している。長さ87センチの自然石を奥石に用い、左右それぞれ5箇の平たい自然石で側壁を一枚並べに組んであったが、入口の構造を示す遺構は残っていなかった。石室の大きさは奥行290センチ、幅82センチ～89センチ、高さ40～47センチで、礫床は北東側にやや低く傾いている。側石の大きさは幅60センチ、高さ45センチ内外で、これらを縦に立てて組んである(第32—33図)。石室の内部に充填した礫は二次的堆積物で、その礫層の中から、5つの断片に毀われた1箇分の銅鏡の破損品をはじめ、鉄刀の断片6、鉄製品の断片1、鉄鏃の柄部とみられる棒状の鉄片72箇、須恵器の盃、埴、坏、蓋坏、高坏各1箇ずつと、その他の破片56片のほか、土師器の盃と坏や破片10箇を採集した。

この古墳の石室で特筆すべきは、石室の中から銅鏡片が出土したことである。

銅鏡片は4片で、これは1箇分の銅鏡をなす。幸いに口縁部の部分が2片残されているので、ほぼ口径約15センチを有するものと推せられる(図版29—8・9)。良質のものである。

須恵器盃1・埴1・坏1・杯蓋1・高坏1、土師器盃及び坏の破片若干発見された。

なお、二次堆積層である礫層中から出土した須恵器片65片、土師器片10片についてみると、厚手の須恵器の胴部片はみあたらなかったが、長頸壺の口縁部とみられる破片(第27図—7)が1点出土している、土師器片はすべて破片である。

(『見島総合学術調査報告』431—432頁)

『見島総合学術調査報告』における本墳に関する記述は、他墳の報告と比べても極めて簡略なものとなっている。石室主軸方位に関する記載がないこともその一端を表しているが、今トレース原図を用いて概測すると、S41°Wの値が求められる^{註1}。

石室は奥壁が1石、両側壁が5石からなるが、石室長を調整するためか右壁は奥壁前に小石を据えており、一方で左壁は第1石が奥壁を挟み込んでいるため、開口部とされる南西側から石室が構築され、奥壁側で全長の調整を図ったかのような印象を受ける。西部域の他のB I 式(箱式石棺形)石室を見ると、奥壁と左右側石との端部を合わせるもの(第152・154号墳)と両側壁で奥壁を挟み込むもの(第155・156号墳)に区分され、中部域のB II 式石室もそのどちらかで構築されていることから、本墳が例外的な構造であることが分かる。第153号墳からは人骨の出土がなく、遺物も極めて少量であるため、追葬の有無を確認する根拠は乏しいが、他墳の石室構造から見て追葬に伴い改築が行われた可能性が高いと考える。なお、現在史跡公園内に保存されている石室は、開口部とされる南東部が幅80cm程度の大き石で閉塞されている。これは報告にある転落した天井石(写真13手前の石か)を使用しているものと想像される



写真13 第153号墳石室全景(南西から)
※文献7「434頁 第32図 第153号墳の石室の状態」を転載



写真14 第153号墳現況
※2012年12月(南西から)

が、確証はない。

石室規模に関する記述は、今実測図に確認する数値と近似値を示しており、齟齬のないものとなっている。ただし、写真13および現地で確認する限り、左壁第3・4石は実測図より外側に置かれているように感じられる。

また、実測図に描き込まれた礫床は大ぶりで第151・152号墳と通ずるが、写真を見ると石室周囲に堆積する礫に大きさが近いため、流入礫または地礫である可能性も拭いきれない。

次に遺物に関する記述を確認すると、床面に遺存した遺物はなかったようで、全て石室内に流入した礫中からの出土とされる。金属製品としては5片(4片)に割れた銅銚、鉄刀片5点、鉄鏃と見られる棒状製品72点、鉄製品の断片1点が確認されたようである。土器資料では、須恵器として埴、壺、坏、坏蓋、高坏が1点ずつと破片56点、土師器として埴、坏の破片が10点程度が存在したとされる。また須恵器には大型品の破片はなく、長頸壺の口縁部片が1点存在したと附記されている。

【註】

1)『見島総合学術調査報告』第39図「見島古墳群の分布図Ⅱ」(本書図2)を見ると、第152号墳と第153号墳はほぼ方向を一にしているように見られるが、現地で確認する限り第152号墳に比して第153号墳は明らかに開口部を西に振っている。

第2節 第153号墳の出土資料

第1項 土器類

第153号墳出土土器類は、埋蔵文化財資料館では確認されず、萩博物館に一括して収蔵されている。萩博物館所蔵資料に付された注記カードには、全て「153号 19610903」という共通した遺構・年月日が記載されている。今回の調査で確認できた土器資料は、小片も含め須恵器11片、土師器11片であり、『見島総合学術調査報告』に記述された須恵器の出土量と一致しない。また須恵器壺、高坏も認められなかった。これらの資料に関しては今後とも調査を継続することとし、本稿では今回確認した資料のみ報告を行う。

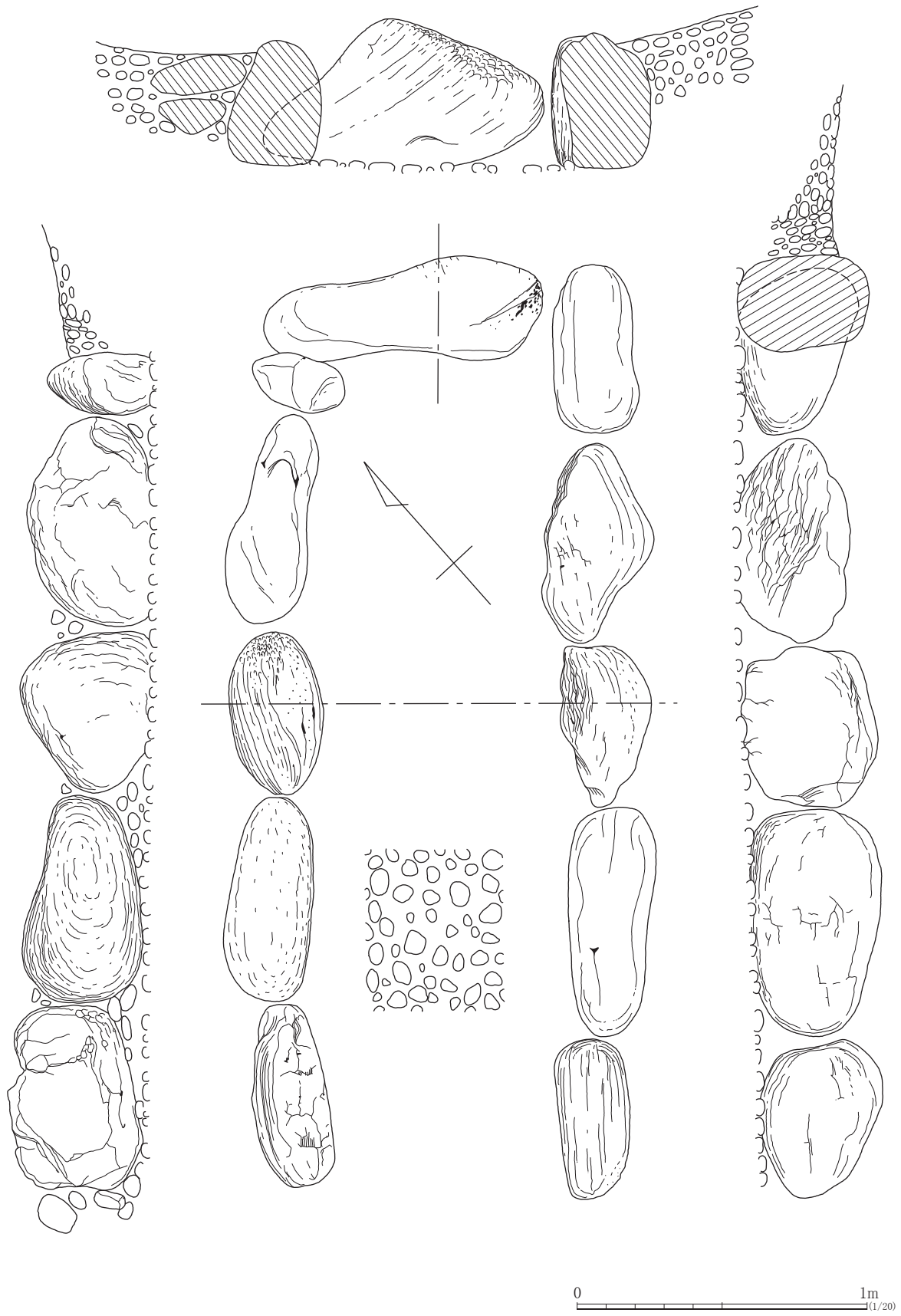


図9 第153号墳石室実測図

1. 須恵器(図10、写真15、表3)

図示可能な須恵器として、坏・坏蓋・長頸壺が各1点ずつ存在する。

H1は坏蓋口縁部片。器壁が薄く、口縁をわずかに下垂させる、端部は丸く収めている。外面に灰を被る。H2は坏口縁部片。直線的に立ち上がる体部から、口縁をわずかに外反させる。焼成不良品である。H3は『見島総合学術調査報告』に図示された長頸壺口縁部片である。直線的に開く頸部から、口縁部を強く外反させる。口縁下に沈線を2条巡らせている。復元口径13.1cm。内面に「63MJ153」の注記が見られるが、「61MJ153」の誤記であることは疑いが無い。

2. 土師器(図10、写真16、表3)

いずれも小片であり、図示可能な破片は坏3口縁部点のみである。

H4は器壁が厚い個体で、内湾しながら体部から口縁に立ち上がる。外面にミガキが施されており、内面にはわずかに放射線状の暗文が遺存している。暗文は左下から右上に施されるが、端部を左上方に跳ね上げている。H5は体部から直線的に口縁に移行する個体と見られる。器壁が薄く、口縁内端部をわずかに肥厚させる。外面に口縁下位にミガキが施されている。H6も体部から直線的に口縁に至る個体であるが、口縁部形態と胎土の相違からH5とは別個体と判断した。口縁端部を尖り気味に丸く収めており、口縁下の内外面に丁寧にミガキを施している。

第2項 金属器類

金属器の内、『見島総合学術調査報告』にて鉄刀片5点、鉄鏃と見られる棒状鉄製品72点など一定量の出土が報告される鉄製品に関しては、埋蔵文化財資料館、萩博物館の両館においてその存在確認に努めたが、発見には至っていない。他墳出土品に混入している可能性も残るため、今後とも調査を継続する意向である。ここでは、今回確認できた5片(4片)に割れた銅錠のみを報告する。

1. 銅製品(図11・写真17・表4)

Hbr1は『見島総合学術調査報告』において図示されていないものの、図版29に写真が掲載されている資料である。資料は比較的大きい口縁一体部片(写真17上段)と、同一個体と見られる口縁部片(写真17下段)3点、同一個体の可能性がある体部片1点からなる。重量はそれぞれ12.19g、8.09g、3.35g、1.76g、1.47gを量る。

図化に際しては、最も大きい破片から、口縁をほぼ円形かつ水平と仮定し、口径等を復元した。復元口径13.8cm、残高は口縁下3.5cm。体部の器壁は最薄部で0.4mmと極めて薄い。口縁内端を肥厚させており、その厚みは2.5mmを測る。外面口縁下1.9cmに見られる3条の沈線は、島立南栗遺跡出土例(長野県松本市)等多数の銅錠にも見られることから意図的な加飾とも思われるが、錆に覆われているため全周するものかどうか判別を付けがたい。他の細かな横方向の擦痕は、鑄造後にロクロで挽き削った痕跡と見られる。当資料は佐波理錠と見られるが、未だ科学分析が実施されておらず、萩博物館の今後の調査に期待したい。

【註】

1) 高桑俊雄ほか(1984)『松本市島立南栗遺跡緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告No.32, 松本市教育委員会(編), 松本(長野)

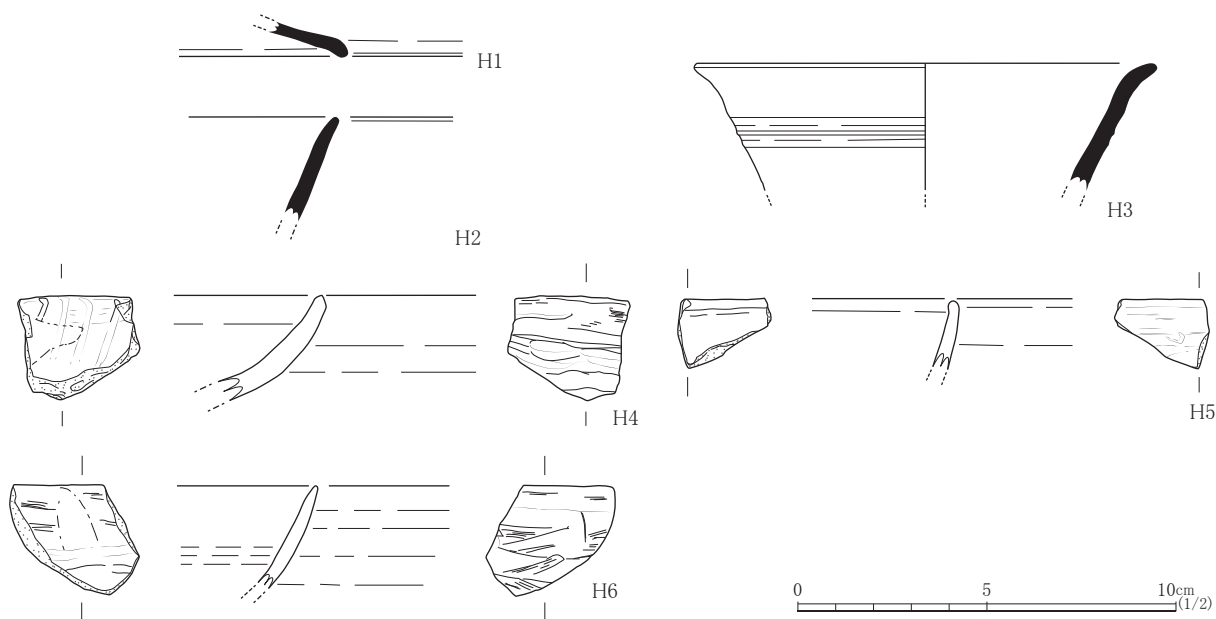


図10 第153号墳出土土器実測図

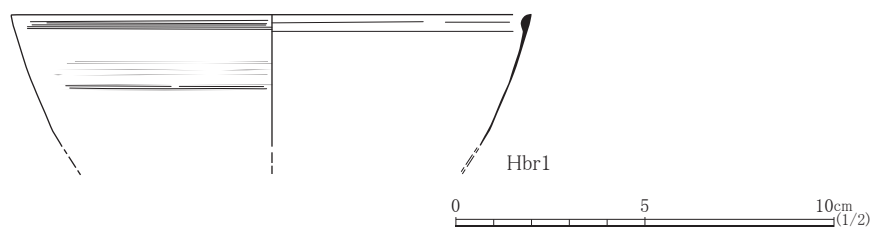


図11 第153号墳出土銅製品実測図

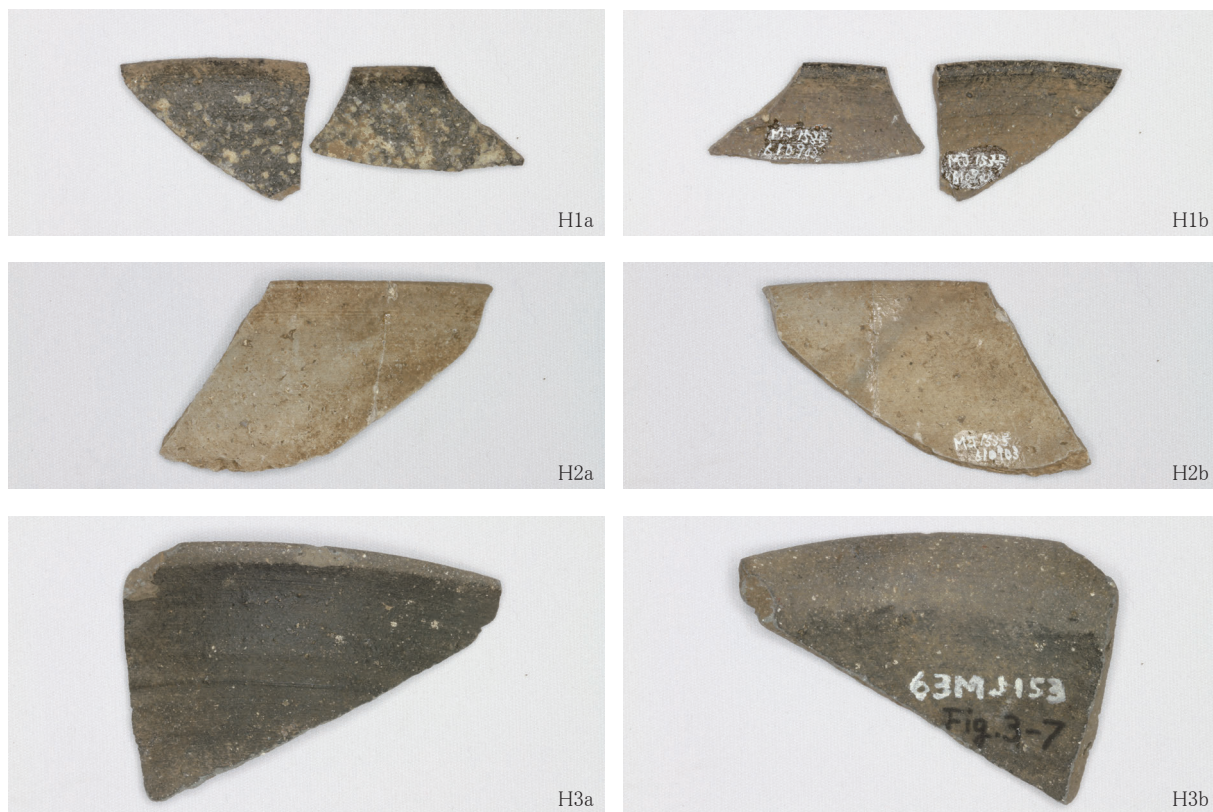


写真15 第153号墳出土土器①

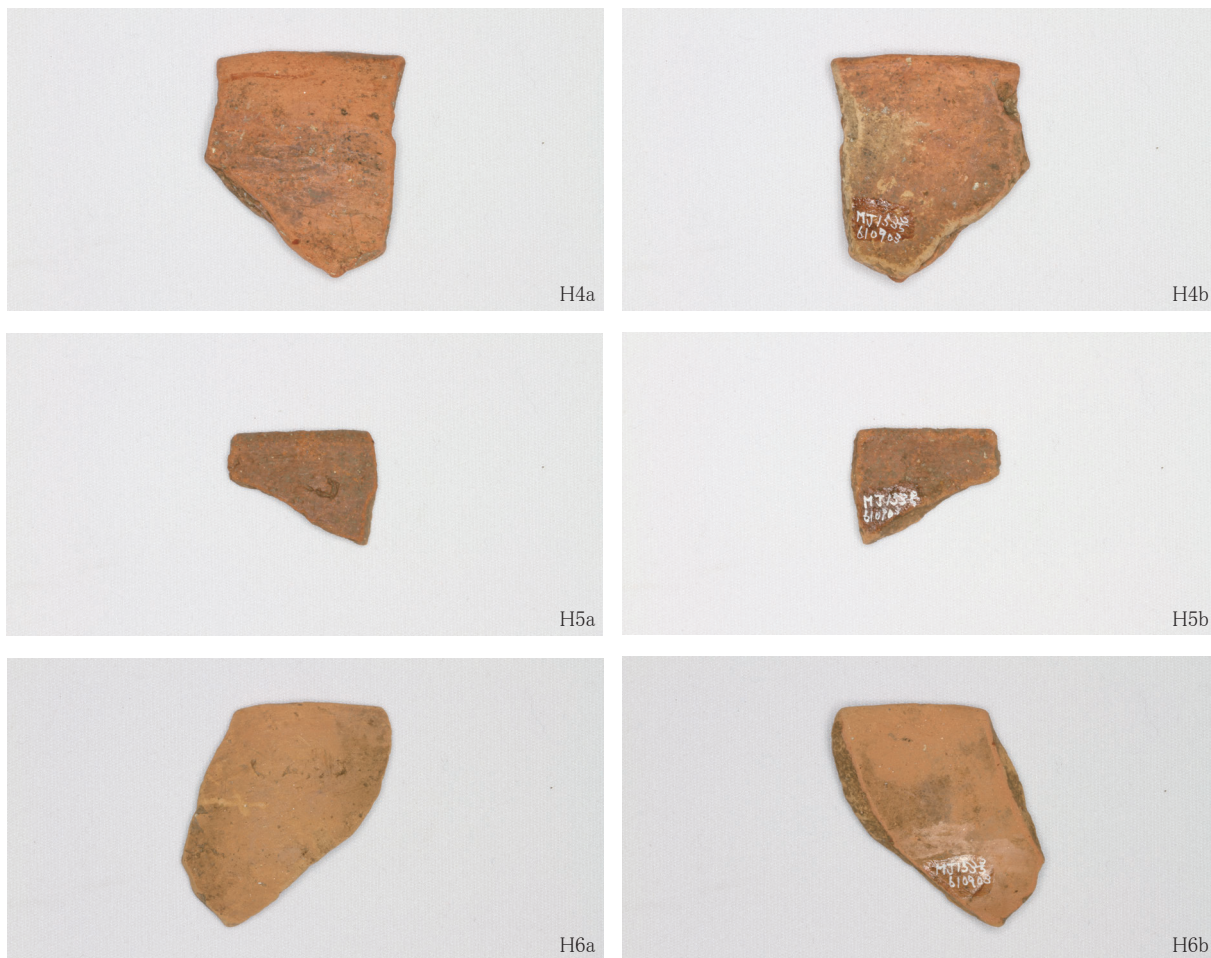


写真 16 第 153 号墳出土土器②

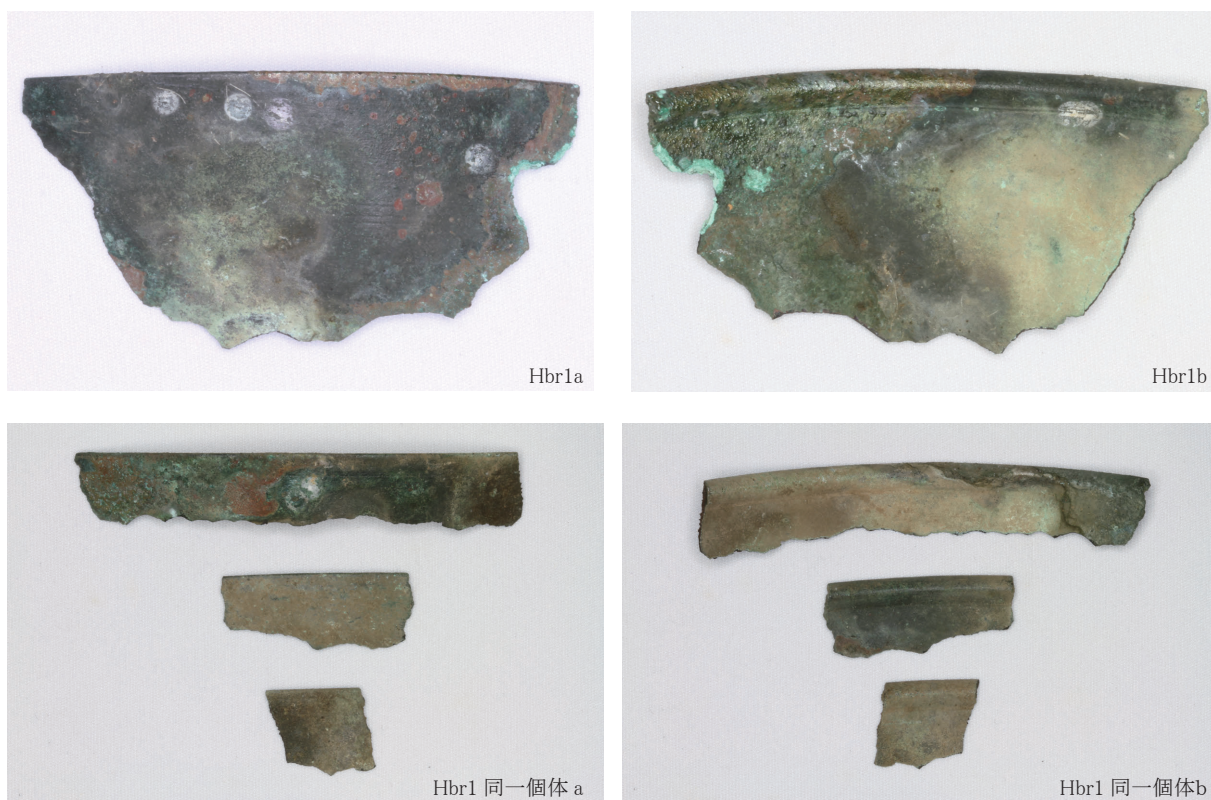


写真 17 第 153 号墳出土銅製品

表3 第153号墳出土遺物（土器）観察表

法量（）は復元値 △は残存値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	焼成	備考
					①外面	②内面			
H1	第153号墳	須恵器 坏蓋	口縁部	③△0.95	①暗灰色(N3/)	②褐色(7.5YR4/1)	密	良好	口縁を弱く下垂させ、端部を丸く収める。
H2	第153号墳	須恵器 坏身	口縁部 ～体部	③△2.7	①②灰黄色(2.5Y6/2)		密	やや不良	体部が直線的に外方に立ち上がる器形であり、口縁をわずかに外反させる。口縁端部は丸く収める。
H3	第153号墳	須恵器 長頸壺	口縁部	①(13.1) ③△3.35	①黒褐色(10YR4/1) ②褐色(10YR3/1)		密	やや不良	『見島総合学術調査報告』第27図の7(428頁)に該当。口縁下に2条の沈線を巡らす。口縁端部を「く」字状に強く外反させる。
H4	第153号墳	土師器 杯身	口縁部 ～体部	③△2.7	①橙色～明赤褐色 (5YR6/6～5/6) 顔料 赤褐色(2.5YR4/6) ②明赤褐色(5YR5/6)		やや粗	軟	やや器壁の厚い個体であり、緩やかに内湾しながら口縁に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に丸く収める。内面は摩耗が激しいが、外面にはミガキが施されている。内面に放射線状の暗文が残り、外面口縁下に赤色塗彩が見られる。
H5	第153号墳	土師器 杯身	口縁部 ～体部	③△1.8	①②にぶい赤褐色～ 明赤褐色(5YR/4～5/6)		やや粗	軟	口縁端部内面を肥厚させる。口縁部内外面横ナデ、体部外面にミガキが施される。
H6	第153号墳	土師器 杯身	口縁部 ～体部	③△2.7	①②橙色(5YR6/6)		密	やや軟	わずかに内湾する体部から直線的に口縁に至る。口縁端部は尖り気味に丸く収める。内面は横ナデ、外面はミガキが施される。

表4 第153号墳出土遺物（銅製品）観察表

法量は残存最大値（）は復元値 ▲は他と合計

遺物 番号	遺構・ 層位	種類	部位	法量				備考
				①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	
Hbr 1	第153号墳	銅鈍	口縁部～体部	口径(13.8cm)	器高3.5cm	器壁厚0.4mm(最薄部)	重量12.19g	『見島総合学術調査報告』図版29-8・9に該当。緩やかに内湾する体部を有し、口縁内端部を肥厚させる。外面には横方向の擦痕が見られる。口縁部片4片、体部片1点が萩博物館に収蔵されている。

第IV章 第155号墳の調査

第1節 昭和36年の現地調査

第155号墳も見島ジーコンボ古墳群学術発掘調査第2年度である昭和36年(1961)に調査の手が加えられている。出土資料は埋蔵文化財資料館と萩博物館に分有保管されているが、埋蔵文化財資料館所蔵資料に同封された注記カードには「昭和36年9月2日」、萩博物館所蔵資料に同封された遺物カードには土器に「19610903」、鉄製品に「1961.9.4.」の年月日が認められることから、調査は9月2日から4日の3日間で実施されたものと想像される。

ここでも『見島総合学術調査報告』に記載された第155号墳の調査成果報告文を転載すると同時に、山口大学埋蔵文化財資料館に保管されている「第35図 第155号墳石室実測図」トレース原図の再トレース図(図12)を掲載する。

第155号墳 第154号墳の西北西約7メートルの箇所にある石室で、今回発掘して調べた古墳の最西端に当る。石室のほぼ中央部に、防風林として植林された樹令30年ぐらいの黒松が生えているので、発掘調査は石室の東半分しか行なうことができなかつた。

方位はS76°Wで西南西に面し、1箇のしっかりした自然石を奥石に用い、平たい自然石を縦に使って側壁を造っている。天井石はすでになく、床面は砂利を含んだ灰黒色土で、石室の内部には土を含む円礫が充填していた。石室内部の堆積物は、植林された箇所が攪乱されているほかは、ほとんどそのままになっていた。

外部から観察した奥行きは約258センチ、幅約75～90センチで、床面からの高さは50センチを測り、遺骸の出土状態や、39箇の歯牙の形態と大きさや磨耗度などから、成人2体と幼児1体の少なくとも3体分の遺骸が埋葬されていた重葬墳であることがわかる。人骨は床面とその上に堆積した土礫層の中とにみられ、いずれも四肢骨が水平位に遺存し、最初に埋葬されてから若干の時間を経過して次の遺骸を埋納したことを示している(第35図、図版25)。

歯牙には、著しく磨耗した大形の臼歯と切歯や、若々しく盛り上がり全く磨耗していない大形の臼歯と切歯に、歯根が吸収された乳臼歯が混っており、これらが石室の北東部からまとまって出土したところからみると、3体の遺骸は頭部を奥壁側に置いて埋葬してあったようである。1口の鉄製刀身は南側石に近接して出土し、銀環と鉄鋌との各1箇は床面に近い土層から検出した。このほか鉄鏃か刀子かの柄部かを区別しがたい鉄製品多数と、須恵器の破片12片を採集している。また流入した土礫の中に灰黒色の浮石が若干混っていた。なお石室の外部から1箇の寛永通宝を検出している。

鉄製刀身1 破断され4片にわかたれている直刀である。刃幅約3センチに相定されるが、長さは明らかではない。

銅製の責金具及び卵円形の鉄鏢半欠のものがそれぞれ1箇残存している。

鉄製刀子 2 破片であるが、1は長さ12乃至13センチ前後に推定される。通有の形式である。

小銅環 1 外径1センチ前後位の環体の充実した円環で一方に開きがある。錆化が著しい。

(『見島総合学術調査報告』433-436頁)

第155号墳は古墳群の最西端部に位置し、第154～157号墳、番外4～6号墳の7基で構成される仮称西部域W支群に含まれる。現地で確認すると、礫浜堤の頂部よりやや北側の緩斜面に形成されているように感じられる。

昭和36年の調査では、石室のほぼ中央に黒松が生えているために石室の東半分しか掘削を行えな



写真 18 第155号墳石室全景(北東から)

※文献7「図版 25 第155号墳石室」を転載



写真 19 第155号墳遺物出土状況(北から)

※文献7「436頁 第36図 第155号墳の鉄刀等の出土状態」を転載



写真 20 第155号墳現況※2012年12月(東から)

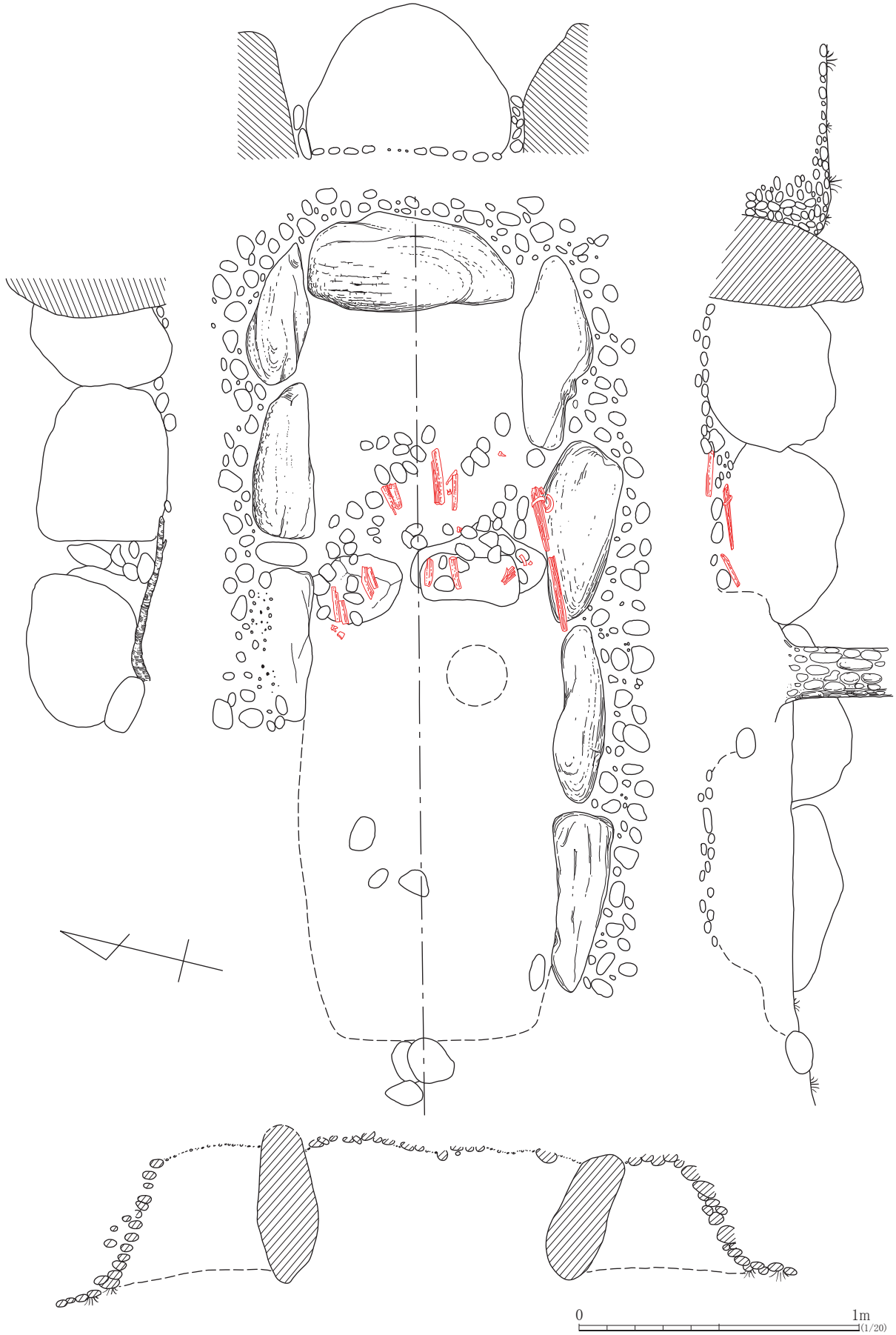


図12 第155号墳石室実測図

かったとされる(写真18、図12)が、現在その黒松は抜根されている(写真20)。

石室は奥壁を両側壁で挟み込んで構築しており、左側壁4石、右側壁3石が確認されている。天井石は遺存しなかったようで、調査写真にも確認できない。石室内には土を含む円礫が充填していたものの、床面は残っていたようで、西部域では比較的遺存状態の良好な墳墓と言える。

床面と堆積土中から出土した人骨に関しては、埋蔵文化財資料館所蔵資料については過去に松下孝幸氏に鑑定^{註1}いただいたが、今回の調査でさらに埋蔵文化財資料館から少量の骨片が、萩博物館からまとまった骨歯片が発見されたため、松下氏に再鑑定を請うた。その結果、成人男性1体・成人女性1体・幼小児2体の存在が確認された。鑑定の詳細は本書付篇をお読みいただきたいが、第151号墳^{註2}に続く狭小な石棺形石室への多数埋葬、および小児人骨の確認は、見島ジーコンボ古墳群の遺跡評価に大きく影響を与えるものと考えている。

出土遺物に関しては、鉄刀1口が南側石に近接して出土し(写真19、図12)、床面付近の土層から銀環1、鉄鋌1が出土したとされるほか、鉄鏃または刀子片多数、須恵器片12点、石室外から寛永通宝1枚の出土が記述されている。また文末に鉄製刀身1点、銅製責金具1点、鉄罅1点、鉄製刀子1点、小銅環1点に関する説明文が付されているが、遺物の図写真は掲載されていない。

【註】

1) 文献15

2) 文献19

第2節 第155号墳の出土資料

第1項 土器類

第155号墳出土土器類は、埋蔵文化財資料館と萩博物館とに分有保管されている。今回の調査で両館所蔵品が接合したものは、萩博物館に収蔵させていただいた。

埋蔵文化財資料館の注記カードには「昭和36年9月2日 床面」と記されており、萩博物館の注記カードには「155号床面 19610903」「155号」の2種が確認された。このことから、調査後は接合検討が行われることなく9月2日出土分のみが山口大学に運ばれたものと想像される。

確認された土器類は須恵器が主体であるが、土師器の細片2点、輸入陶器1点、縄文土器1点が存在する。

1. 須恵器(図13、写真21・22、表5)

図示可能である須恵器は全て床面出土である。器種としては坏蓋5点、坏身2点、長頸壺1点が存在する。

H1は完形に復元可能な坏蓋で、埋蔵文化財資料館と萩博物館所蔵資料の接合資料である。ボタン状つまみを有し、扁平な天井部から湾曲して口縁に至り、端部を外反させている。口縁端部は尖り気味に丸く収める。復元口径16.4cm、器高3.05cm、つまみ径3.0cmを測る。全体的にシャープなつくりで、天井部外面には回転ヘラ削り痕が明瞭に残る。H2も坏蓋で、同じく埋蔵文化財資料館と萩博物館所蔵資料の接合資料である。口縁は一部しか遺存していないため、天井と口縁の境界稜線から全形を反転復元した。復元口径は13.0cmとなる。器壁の厚い天井部外面には回転ヘラ削りが施され、口縁部との境界に

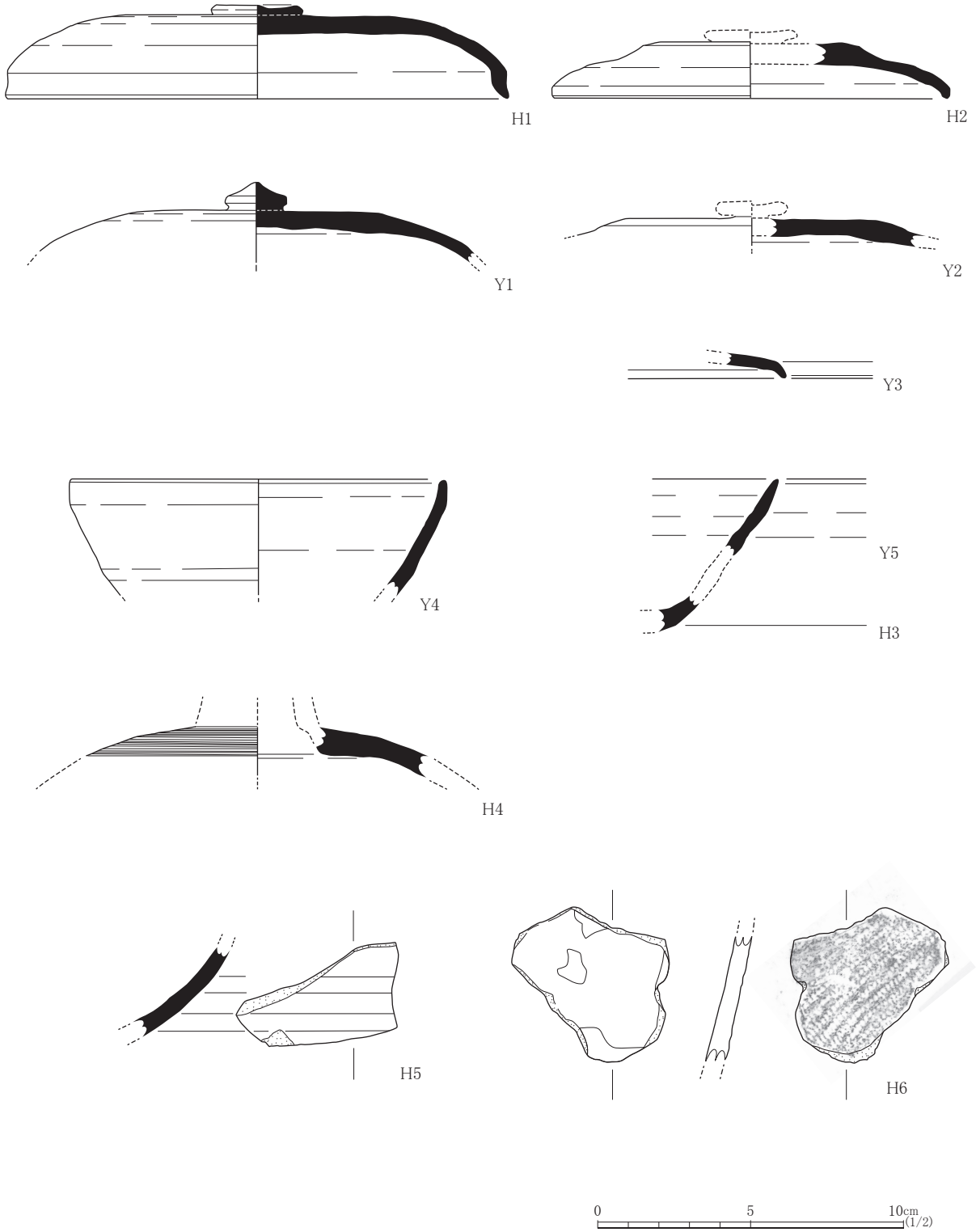


図 13 第 155 号墳出土土器実測図



H1a



H1b



H2a



H2b



Y1a



Y1b



Y2a



Y2b

写真 21 第155号墳出土土器①

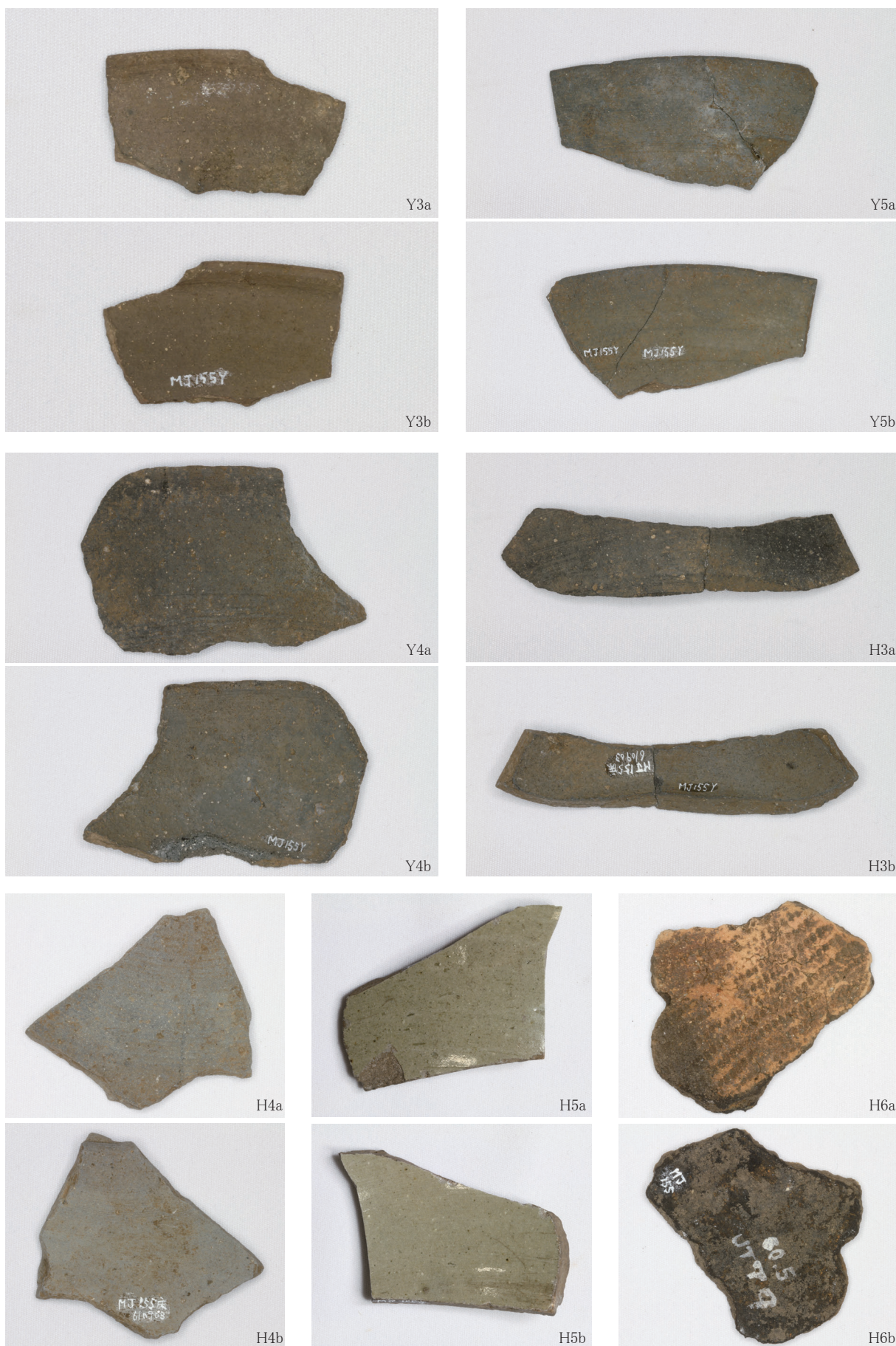


写真 22 第155号墳出土土器②

表5 第155号墳出土遺物（土器）観察表

法量()は復元値 △は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm)	色調	胎土	焼成	備考
				①口径②底径③器高 つまみ径3.0	①外面 ②内面			
H1	第155号墳床面	須恵器 坏蓋	天井部 ～口縁部	①(16.4) ③3.05 つまみ径3.0	①②灰白色(2.5Y8/1)	密	やや不良	萩博物館「MJ155床 610903」と埋蔵文化財資料館「昭和36年9月2日 第155号墳 床面」が接合。 扁平なボタン状つまみを有する天井部から内湾して口縁に至る。口縁部は鳥嘴状に外反させており、端部は尖り気味に丸く収めている。
H2	第155号墳床面	須恵器 坏蓋	天井部 ～口縁部	①(13.0) ③△1.85	①暗灰黄色(2.5Y4/2) ②灰色(6Y5/1)	密	やや不良	萩博物館「MJ155床 610903」と埋蔵文化財資料館「昭和36年9月2日 第155号墳 床面」が接合。 平坦な天井部には回転ヘラ削り調整が明瞭に残る。口縁部は軽く下垂させており、端部を丸く収める。
Y1	第155号墳床面	須恵器 坏蓋	天井部 ～口縁部	③△2.6 つまみ径2.0 つまみ高0.9	①灰色(N4/) ②黄灰色(2.5Y4/1)	密	やや不良	天井部に擬宝珠形つまみ有する。天井部からゆるやかに内湾し口縁に移行する。
Y2	第155号墳床面	須恵器 坏蓋	天井部 ～口縁部	③△0.95	①灰色(6Y6/1) ②灰色(6Y5/1)	密	やや不良	口縁部を「く」字状に下垂させ、端部を尖り気味に丸く収める。内外面とも回転ナデ調整が施される。
Y3	第155号墳床面	須恵器 坏蓋	口縁部	③△0.85	①②灰黄褐色(10YR5/2)	密	良好	胎土および焼成状況より頸部・体部上半が同一個体と判断。外面・頸部内面に灰・自然釉がかかる。
Y4	第155号墳床面	須恵器 坏身	口縁部 ～体部	①(12.2) ③△3.8	①灰色(N4/) ②灰色(N5/)	密	良好	体部はやや内湾して立ち上がり、口縁を直立気味に屈曲させる。口縁端部は丸く収める。内外面とも回転ナデ調整が施されるが、外面体部下位に回転ヘラ削り調整が見られる。
Y5	第155号墳床面	須恵器 坏身	口縁部 ～体部	③△2.5	①灰色(N5/) ②灰色(10YR5/1)	密	良好	クロ水引き成形痕が明瞭に残る。直線的に外方に開く体部から口縁に至り、口縁端部は丸く収める。H3と同一個体か。
H3	第155号墳床面	須恵器 坏身	体部 ～底部	③△1.2	①暗灰色(N3/) ②灰色(7.5Y4/1)	密	良好	萩博物館「MJ155床 610903」と埋蔵文化財資料館「昭和36年9月2日 第155号墳 床面」が接合。 色調・調整・胎土からY5と同一個体の可能性あり。
H4	第155号墳床面	須恵器 長頸壺か	体部	③△1.6	①灰色(N5/) ②灰色(N6/)	密	良好	外面にカキ目が施されており、壺・瓶類の肩部と見られる。頸部の付け根で折損している。埋蔵文化財資料館に接合しない同部位片が存在する。
H5	第155号墳	青磁 碗か	体部	③△2.9	素地 灰色(5Y5/1) 釉 灰オリーブ色(7.5Y5/2)	精緻	良好	無文の体部片。遺物カードには「見島ジーンゴ古墳群 155号」とのみ記される。越州窯産か。
H6	第155号墳	縄文土器	体部		①明褐色明黄褐色 (7.5YR5/6～10YR7/6) にふい 赤褐色(5YR4/4) 黒褐色(2.5YR3/2) ②灰オリーブ色(6YR5/2)	粗	軟	風化が激しいが外面に単節縄文が残る。 内面には初期段階の注記と思われる「6(5)0.5 U(JIT79)」の文字が見られる。60.5が1960年5月を示すのであれば、見島総合学術調査着手以前のものであり、見島ジーンゴ古墳群出土品であるか極めて疑わしい資料である。

明確な段を形成する。口縁は緩やかに内湾しながら降下し、口縁端部をわずかに下垂させる。Y1は坏蓋の天井一口縁部片で、同一個体とみられる破片が多数確認されたが、接合したのは埋蔵文化財資料館所蔵資料だけであった。ややドーム状に膨らむ天井部に径2.0cm、高さ0.9cmの擬宝珠形つまみを有している。外面調整は天井部内側には回転ヘラ削りが、天井部外縁から口縁上位は回転ヘラ削り後回転ナデ、以下は回転ナデ調整が施される。Y2も坏蓋天井一口縁部片で、天井と口縁の境界稜線から反転復元を行った。天井部中央にはつまみが欠損した痕跡が残る。口縁の開きから扁平な器形の蓋と見られる。外面調整は回転ヘラ削り後回転ナデ、内面は天井部が不定方向のナデ、口縁部が回転ナデ。Y3は坏蓋口縁部片。「く」の字状に強く口縁を折り曲げ、端部は尖り気味に丸く収めている。Y2の口縁部である可能性を残すが、色調や焼成具合に違いが見られるため、ここでは別個体として報告する。Y4は坏の体一口縁部片。緩やかに内湾して立ち上がる体部から、屈曲させて口縁を垂直に立ち上げている。口縁端部は丸く収める。外面下位には回転ヘラ削りが見られる。Y5も坏の体一口縁部片。クロ水引き痕が明瞭に残る個体である。口縁端部は尖り気味であるが丸く収める。内外面とも回転ナデ調整が施される。H3は埋蔵文化財資料館と萩博物館の接合資料であり、坏底部片である。色調・胎土・焼成具合からY5の同一個体と見られる。外面下位に回転ヘラ削りが観察される。H4は長頸壺体部片。頸部との接合部で折損している。小片であるが、外面に施されたカキ目から径を復元した。埋蔵文化財資料館にも同一個体と見られる破片が存在するが、接合しない。

2. 磁器(図13、写真22、表5)

1点のみ確認される。H5は碗の体部片と見られる。内面にはシャープなヘラ削りが見られる。内面に文様は観察されない。素地は灰色(5Y5/1)、釉は灰オリーブ色(7.5Y5/2)を呈する。越州窯産青磁と見られる。

3. 縄文土器(図13、写真22、表5)

H6は縄文土器の小片。全面風化が激しいが、外面に単節縄文が残る。内面に初期の注記と見られる「6(5か)0.5 U(Jか)T79」の文字が見られる。経緯は不明であるが、他遺跡資料の混入であろう。

第2項 金属器類

『見島総合学術調査報告』には、銀環1、鉄鋌1、鉄刀1、銅製責金具1、鉄鐔1、銅環1、鉄鏃または刀子の破片多数の出土が記述されている。今回確認できた資料を以下に報告する。

1. 銅製品(図14、写真23、表6)

Hbr1は責金具であり、『見島総合学術調査報告』において銅製責金具とされた資料と見られる。萩博物館では3片が確認され、2片は接合するがもう1片は接合しない。錆に覆われるが、所々に緑青が観察されることから銅製品であることが分かる。Ybr1は不明銅製品。化学分析により銅製品であることが確認されている(本書付篇参照)。残長2.0cmの小型品で、短軸は浅くU字状に湾曲しており、長軸もわずかに湾曲する。両端部をY字状に突出させている。留め具の一種であろうか。

2. 鉄製品(図15・16、写真24・25、表7)

Hi1は鉄刀。直刀であり、『見島総合学術調査報告』にて「破断された4片にわかれている直刀」に該当する。現在、3片が接合され(Hi1a)、Hi1bと合わせ2片として存在しているが、両者は接合しない。両者の現長を合わせると53cmを超えることから、刀身は2尺を超えると見られる。Hi1片側端部が切先と見られるが、錆に覆われるため不明瞭である。Hi2は鐔。同じく「卵円形の鉄鐔半欠」に該当するものであろう。表裏面とも剥離が激しく、わずかに外縁部に原面を残すのみである。長軸径7cm程度、短軸径6cm程度になるものと思われる。Hi3は刀子刀身部片。刃部の大部分は破損しているが、背部は原面が遺存している。残長は6.95cmを測るが、『見島総合学術調査報告』に記される「長さ12乃至13センチ前後に推定される」という刀子であろうか。Hi4は鉄鏃の頸もしくは茎部片と見られる。Hi5も鉄鏃の頸部片か。Hi6は板状の素材を緩やかに曲げた製品。遺存する端部は「く」字状に短く折り曲げられている。刀装具か。Hi7、Hi8は幅0.8cm～1.5cm、厚み2mmの板状製品で、責金具片と見られる。同一個体の可能性があるが、接合しない。なお、Hi6～Hi8は銅製品である可能性を残すが、肉眼では緑青は観察されない。Yi1は薄い板状の素材を湾曲させた製品である。一側面に端部が遺存する。Yi2も同様の特徴を有するが両者は接合しない。刀装具の一種か。Yi3は板状素材をU字状に強く屈曲させた製品である。これも一側面に端部を残す。Yi4は責金具片であろう。幅1.1cm、厚み4mmの状板製品である。Hi7・8と同一個体か。Yi1～Yi4は銅製品の可能性があるが、緑青は観察されない。Yi5は鉄刀片。表裏面とも剥離しているが、背部に原面が残る。刃部は不明瞭であるが、切先部片の様にも見られる。Yi6は刀子の刀身部片。両側面とも錆割れしている。Yi7は刀子茎部片。断面は二等辺三角形を呈する。Yi8も刀子茎部片。断面は膨らんだ長方形を呈しており、全面に木質が遺存する。茎端部は欠失する。Yi9は断面菱形で細長の棒状製品。鉄鏃鏃身部か。Yi10は断面長方形の棒状製品。鉄鏃の茎部もしくは頸部であろう。Yi11～Yi13は棒状鉄片。鉄鏃や刀子の剥離片であろうか。Yi14は湾曲した棒状製品であり、片側に端部が遺存する。周囲に針金状の細い鉄線が螺旋状に巻き付けられている。副葬品であるかに疑問を残す。Yi15は厚みのある鉄片で、鉄刀の断片と思われる。Yi16～Yi22は板状鉄片。刀子や鉄刀の剥離片であろう。埋蔵文化財資料館にはこの他28片の小さな板状剥離片があるが、ここでは図示を省略する。

この他、石室外から出土したとされる寛永通宝は、埋蔵文化財資料館に収蔵されている(写真25)。

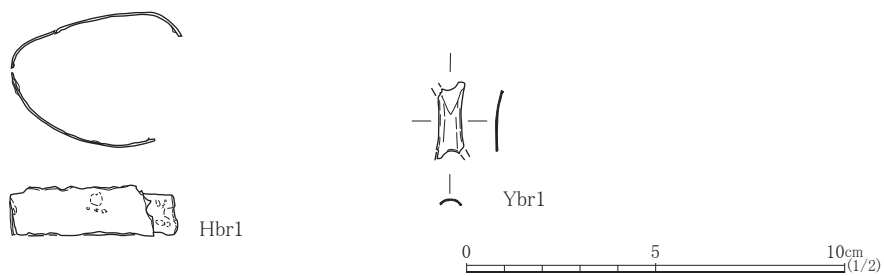


図14 第155号墳出土銅製品実測図

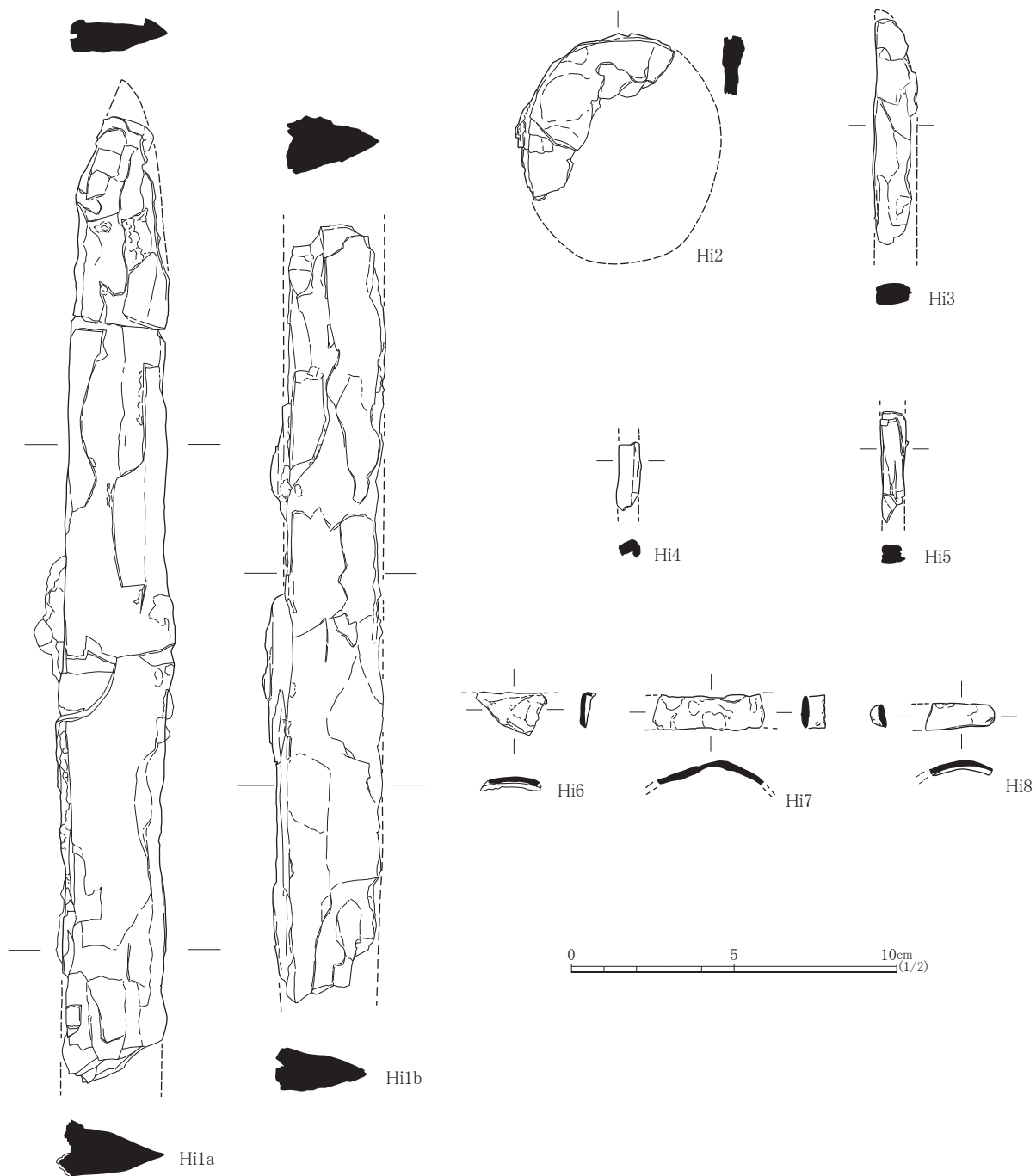


図15 第155号墳出土鉄製品実測図①

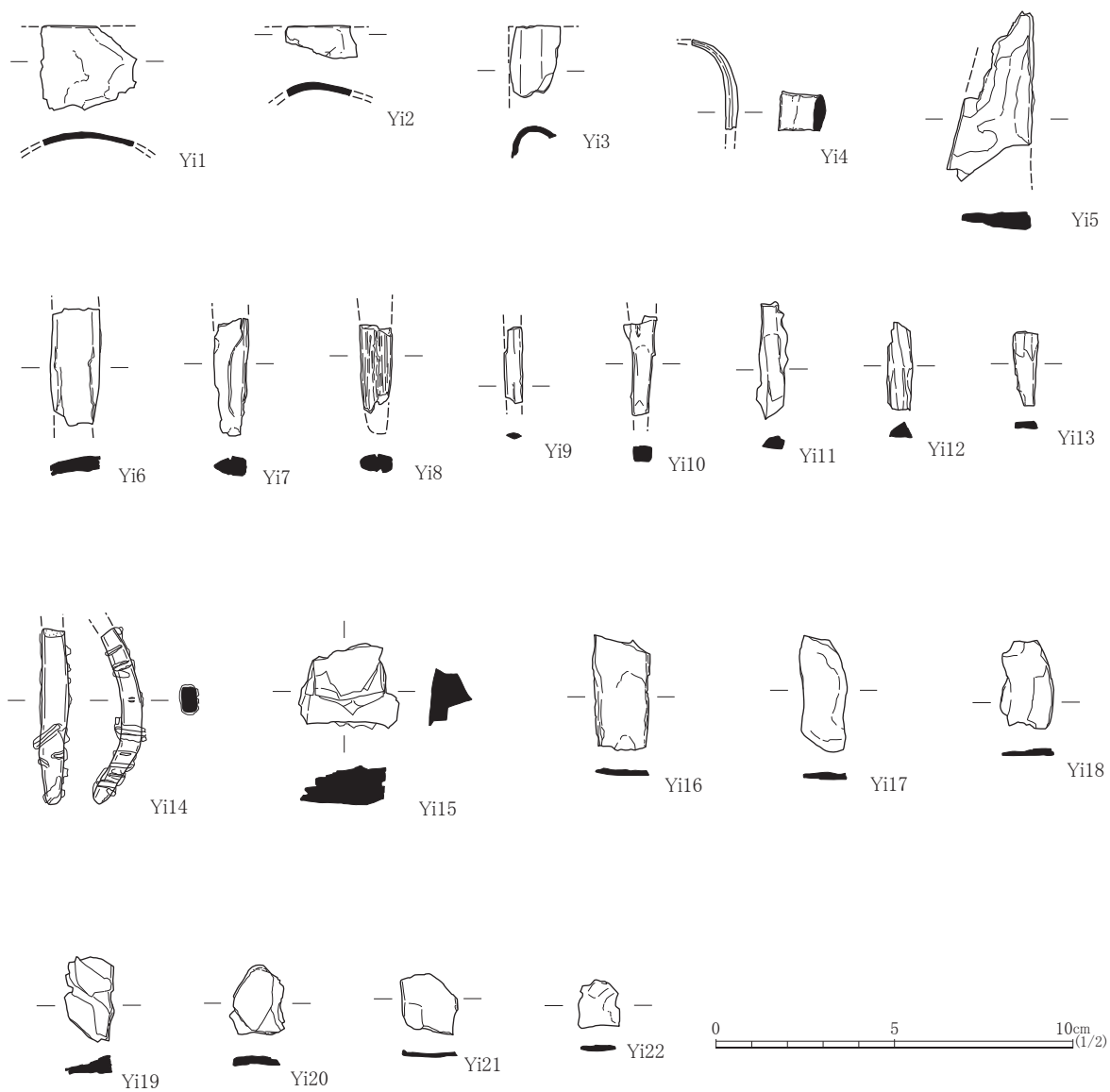


図16 第155号墳出土鉄製品実測図②



写真 23 第 155 号墳出土銅製品



※縮尺ほぼ実寸 (Hi1 は 1/2)

写真 24 第 155 号墳出土鉄製品 (萩博物館所蔵品)



※縮尺はほぼ実寸（寛永通宝は除く）

写真 25 第 155 号墳出土鉄製品（埋蔵文化財資料館所蔵品）

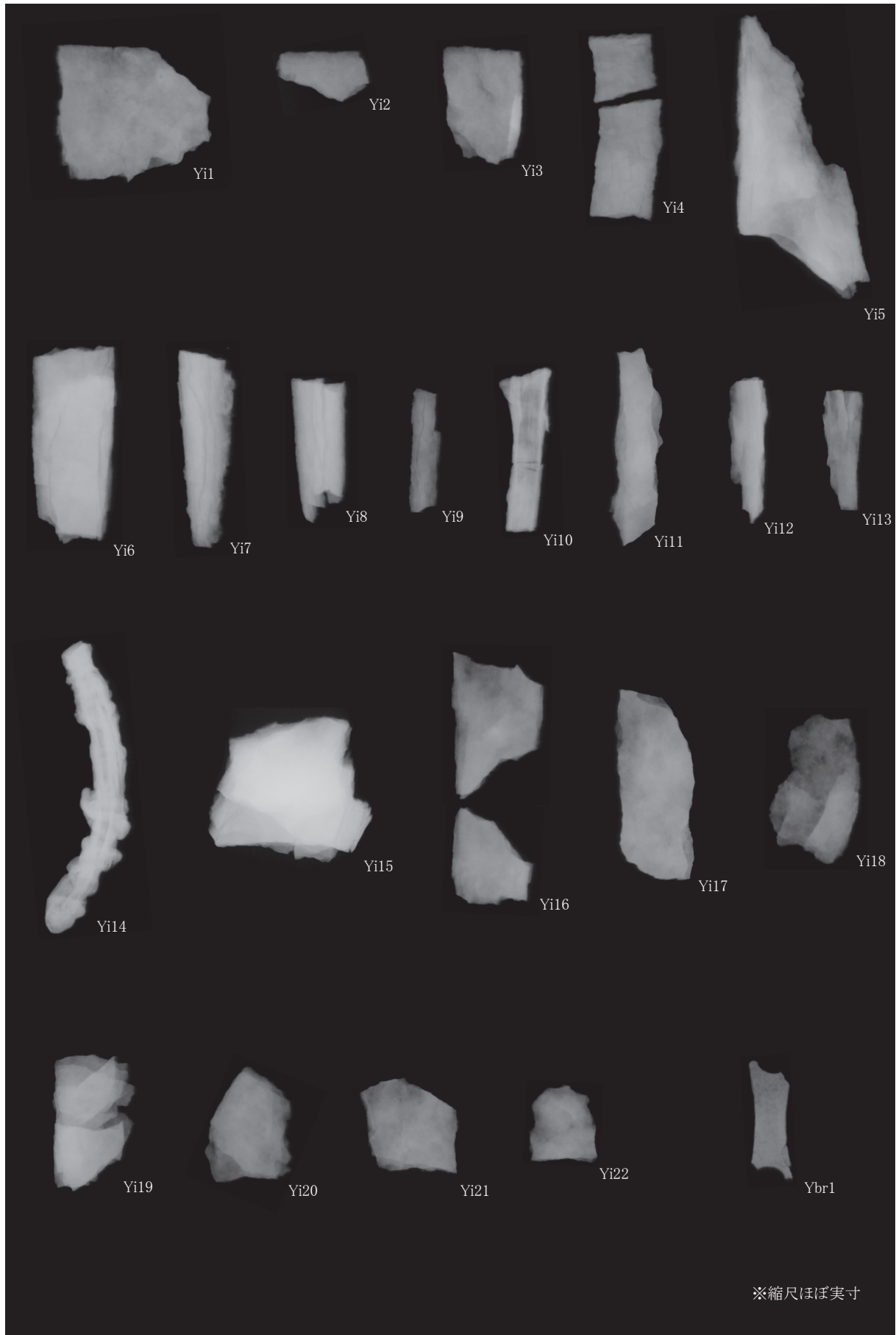


写真 26 第 155 号墳出土鉄製品・銅製品 X 線画像 (埋蔵文化財資料館所蔵品)

表6 第155号墳出土遺物(銅製品)観察表

法量は残存最大値 ()は復元値 ▲は他と合計

遺物 番号	遺構・ 層位	種類	部位	法量				備考
				①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	
Hbr 1	第155号墳	刀装具 黄金具	3/4残存	長軸4.5cm+α 短軸3.4cm 銅板幅1.3cm 銅板厚0.5~0.6mm 重量3.95g 他片0.55g				緑青が観察される。『見島総合学術調査報告』に「銅製の黄金具」とあるのは当資料か。図示した資料は半損品で、他に1点同一個体と見られる小片が存在する。
Ybr 1	第155号墳 床面	用途不明銅製品	両端部欠失	残長2.0cm+α 最大幅0.68cm 銅板厚0.6mm 重量0.22g				長軸・短軸ともに断面は弧を描く。両端部を「Y」に突出させている。何かの留め具か。

表7 第155号墳出土遺物(鉄製品)観察表

法量は残存最大値 ()は復元値 ▲は他と合計

遺物 番号	遺構・ 層位	種類	部位	法量				備考
				①長さ(mm)	②幅(mm)	③厚さ(mm)	④重量(g)	
Hi 1a	第155号墳	鉄刀	刀身部	①296 ②34 ③18 ④236.41				表裏面とも剥離が激しい。3片が接合されている。『見島総合学術調査報告』記述される「破断された4片にわかれている直刀」の3片と見られる。
Hi 1b	第155号墳	鉄刀	刀身部	①239 ②37 ③15 ④229.72				表裏面とも剥離が激しい。『見島総合学術調査報告』に記述される「破断された4片にわかれている直刀」の1片と見られる。
Hi 2	第155号墳	鐔	半損	①51 ②49 ③10.5 ④19.03				表裏面とも剥離が激しいが、外側縁に原面が遺存する。『見島総合学術調査報告』に記述される「卵円形の鉄鐔半欠」に該当するものと思われる。
Hi 3	第155号墳	刀子	刀身部	①69.5 ②13 ③8 ④9.39				背部と切先部に原面が遺存する。
Hi 4	第155号墳	鉄鎌	頭または基部	①21 ②7 ④1.50				断面方形または多角形。錆割れしている。
Hi 5	第155号墳	鉄鎌	頭部	①34 ②7.5 ④2.67				断面方形。側面が錆割れしている。
Hi 6	第155号墳	刀装具か	端部遺存	①13 ②21.5 ③2.3 ④0.91				薄い板状の素材を緩く湾曲させている。端部を直角に折り曲げる。銅製品の可能性あり。
Hi 7	第155号墳	黄金具	両端欠損	①34.5 ②10.5 ③2.8 ④2.22				幅10mmの薄い板材が弧状に曲がる。Hi8と同一個体と見られるが接合しない。銅製品の可能性あり。
Hi 8	第155号墳	黄金具	端部遺存	①21 ②8.1 ③2.5 ④0.80				幅8mmの薄い板材が弧状に曲がる。Hi7と同一個体と見られるが接合しない。銅製品の可能性あり。
Yi 1	第155号墳 床面	刀装具か	端部遺存	①26.5 ②23.5 ③2 ④2.94				2mmの板材を弧状に湾曲させる。1側面の端部が遺存する。Yi2と同一個体と見られるが接合しない。銅製品の可能性あり。
Yi 2	第155号墳 床面	刀装具か	端部遺存	①19.5 ②9.5 ③2 ④0.76				2mmの板材を弧状に湾曲させる。1側面の端部が遺存する。Yi1と同一個体と見られるが接合しない。銅製品の可能性あり。
Yi 3	第155号墳 床面	刀装具か	端部遺存	①20 ②12.5 ③2 ④1.50				2mmの板材をU字状に曲げている。1側面の端部が遺存する。銅製品の可能性あり。
Yi 4	第155号墳 床面	黄金具	両端欠損	①25 ②11 ③3.3 ④2.22				幅11mmの薄い板材が弧状に曲がる。Hi7・8と同一個体であろうか。銅製品の可能性あり。
Yi 5	第155号墳 床面	鉄刀	切先部か	①47.5 ②21.5 ③5.9 ④5.95				背部に原面が遺存するが、表裏面は剥離が激しい。刃部は部分的に原面が残るように見える。切先部か。
Yi 6	第155号墳 床面	刀子	刀身部	①33 ②14 ③6.1 ④5.30				両側面が錆割れする。刀子刀身部と見られる。
Yi 7	第155号墳 床面	刀子	基部	①33 ②9.6 ③5.9 ④2.73				断面二等辺三角形。刀子の基部と見られる。
Yi 8	第155号墳 床面	刀子	基部	①25 ②9 ③6 ④2.26				断面は膨らんだ長方形。全面に木質が遺存する。
Yi 9	第155号墳 床面	鉄鎌	鎌身部	①21.5 ②5 ③2 ④0.35				断面菱形。両端部を欠損する。幅細の鎌身部と見られる。
Yi 10	第155号墳 床面	鉄鎌	頭または基部	①28 ②8.6 ③4.9 ④1.63				断面長方形。両端部を欠損する。
Yi 11	第155号墳 床面	鉄片		①33 ②8.2 ③3.7 ④1.72				断面台形の剥離片。鉄刀・鉄鎌の剥離片か。
Yi 12	第155号墳 床面	鉄片		①24.5 ②6.5 ③4.3 ④1.15				断面三角形の剥離片。鉄刀・鉄鎌の剥離片か。
Yi 13	第155号墳 床面	鉄片		①21 ②6.8 ③2.7 ④0.56				板状剥離片。鉄刀・鉄鎌の剥離片か。
Yi 14	第155号墳 床面	棒状製品	端部遺存	①49 ②7.9 ③4.9 ④4.85				幅8mm、厚さ5mmの弧状に曲げられた棒状製品。片側端部が遺存する。周囲に針金状の金属線が螺旋状に巻き付けられている。
Yi 15	第155号墳 床面	鉄片		①28.5 ②22 ③12.4 ④10.98				厚みのある剥離片。鉄刀刀身部の断片か。
Yi 16	第155号墳 床面	鉄片		①32.5 ②15.6 ③3.8 ④2.63				板状剥離片。刀類の断片か。
Yi 17	第155号墳 床面	鉄片		①32.5 ②12.6 ③2.6 ④2.45				板状剥離片。刀類の断片か。
Yi 18	第155号墳 床面	鉄片		①24.5 ②14.5 ③2.4 ④0.96				板状剥離片。刀類の断片か。
Yi 19	第155号墳 床面	鉄片		①23.5 ②13 ③4.5 ④2.09				板状剥離片。刀類の断片か。
Yi 20	第155号墳 床面	鉄片		①19.5 ②15 ③2.5 ④1.12				板状剥離片。刀類の断片か。
Yi 21	第155号墳 床面	鉄片		①17 ②15.5 ③2 ④1.00				板状剥離片。刀類の断片か。
Yi 22	第155号墳 床面	鉄片		①13.5 ②11.5 ③2 ④0.52				板状剥離片。刀類の断片か。

第V章 第156号墳の調査

第1節 昭和36年の現地調査

第156号墳も見島ジーコンボ古墳群学術発掘調査第2年度である昭和36年(1961)に調査の手が加えられている。出土資料は萩博物館にのみ存在しており、埋蔵文化財資料では確認されていない。萩博物館所蔵資料に同封された注記カードには出土年月日情報が記載されていないため、調査期間は不明である。

ここでも『見島総合学術調査報告』に記載された第156号墳の調査成果報告文を転載するとともに、山口大学埋蔵文化財資料館に保管されている「第37図 第156号墳石室実測図」トレース原図の再トレース図(図17)を掲載する。

第156号墳 第155号墳の北東約3.5メートルの地点にあるやや小型の石室である。その方位はS67°Wで、側石以下の主体部は浜堤面を掘り込んで構築し、奥行165センチ、幅43～45センチ、高さ約45センチである。奥石には平たい1枚の自然石を用い、側石は平たい自然石や割石を縦に1枚並べに置き、もともと両側石とも4枚をもって組まれていたようであるが、天井石と北側石の2箇所が取り除かれている(第37図、図版26)。

床面は小石を含んだ黒色土からなり、数箇の平たい割石が不規則に床面の黒色土の上に落ちていた。その下からそれぞれ1箇の須恵器の平瓶と埴とともに、1箇の土師器の盃が出土した。なお人骨は全く遺っていなかった。

なお床面から出土した須恵器片79片、土師器盃1点についてみると、須恵器は厚手な口縁部片が1点(第27図一20)で、他は胴部破片である。中に、口縁部を欠く平瓶(同27図一22)が1点出土している。薄手の破片は蓋、坏などである。蓋はすべて被せ式で、撮みは擬宝珠形のものほか、球状の例(同27図一23)が1例ある。坏はへら起こしによる平底またはこれに付高台のある場合があるが、断片であって復原はし得なかった。

土師器は盃形(同27図一24)で、丸底を呈し、口径11.3センチ、高4.2センチに測られる。

このほか石室内に堆積した円礫中から坏形須恵器の破片が出土した。底部を欠いている。

(『見島総合学術調査報告』436-437頁)

当墳は古墳群の西端部に位置しており、石室は礫浜堤の北側傾斜地に築かれている。石室規模は全長165cm、幅43～45cm、高さ約45cmで成人1名がなんとか収まる程度であり、見島ジーコンボ古墳群の中でも最小規模のものとなっている。第155号墳同様奥壁が両側壁に挟み込まれて構築されており、両側壁は4石で構成されていたと推測されているが、右側壁第3・4石は調査時には既に除去されていたようである。報告では側石に自然石とともに割石が用いられているとされるが、現地で確認する限り明確な割石は用いられていない。天井石は遺存していなかったようである。この他、写真27、図17を見る限りでは開口部側にも大ぶりの石が据えられているように認められるが、この石に関する言及はなく、石室断面見通し図からも省かれている。転落石との判断であろうか。

出土遺物に関しては、床面から須恵器片79片、土師器盃1点が出土したとされる。特に床面上に落下した割石の下から須恵器の平瓶と埴(短頸壺)、土師器の盃(坏)が出土したとされ、写真28、図17にその様子が確認できる。須恵器短頸壺の出土状況は不明であるが、土師器坏は石室のほぼ中央に、須恵器平瓶はその南東側、石室左壁沿いにそれぞれ正置した状態で出土している。他にも床面からは須恵



写真 27 第156号墳石室全景(西南西から)
※文献7「図版26 第156号墳の石室及び遺物出土状態」を転載



写真 28 第156号墳遺物出土状況(東北東から)
※文献7「図版26 第156号墳の石室及び遺物出土状態」を転載



写真 29 第156号墳現況※2012年12月(南西から)

器大型品の口縁部、小型品では擬宝珠または球形のつまみを有する被せ式の蓋、高台付きや無高台の坏が出土したと記述される。

また、金属器および人骨は出土しなかったようであり、埋蔵文化財資料館、萩博物館の両館においても確認されていない。

【註】

1) 現在史跡地では、右側壁の第3・4石は復元されている。

第2節 第156号墳の出土資料

第1項 土器類

第156号墳出土土器類は、萩博物館にのみ収蔵されている。

萩博物館で確認できた資料は、『見島総合学術調査報告』にて図示された資料のほか、土師器小片2点のみであった。報告には「須恵器片79片」とあり、擬宝珠形つまみを有する被せ蓋(かえりのある坏蓋)や高台付きまたは無高台の坏身の存在も記されているが、該当する資料は発見できていない。また『見島総合学術調査報告』に図示された資料の内、口縁を欠くが体部が完形に残る須恵器平瓶についても発見に至らなかった。

遺物の注記カードには、須恵器短頸壺を除き全て「156号 床面」と記入されていた。前述したが、須恵器短頸壺も報告文章を読む限り床面出土品と見なして良いだろう。

1. 須恵器(図18、写真30、表8)

蓋、甕、短頸壺が各々1点確認された。

H1は蓋天井部片。ほぼ平坦な天井の頂部に高く膨らみのしっかりとした球状の擬宝珠形つまみがやや傾いて付く。つまみは径1.95cm、高さ1.4cmを測る。坏蓋と見られるが、短頸壺蓋の可能性も残す。H2は甕口縁部片。小片であるが、歪みが少ないと仮定し復元すると口径は27cm内外となる。頸部は強く屈曲し、口縁上部に粘土紐を付加することにより口縁端部を成形している。端部内面は断面三角形に肥厚し、上端に面を形成する。山口県内ではあまり見かけない特徴を有する口縁部であるが、防府市末田2号窯出土甕に近い形態を見出すことができる。H3は中型の短頸壺。体部下半を欠失する。『見島総合学術調査報告』には復元した状態で写真が掲載されているが、今回の調査時には大部分接合が剥離した状態にあった。また、接合に歪みも見られたため、再度全体を復元し直した。球形の体部から頸部を垂直気味に立ち上げ、口縁端部に膨らみ気味ではあるが面を形成する。内面上部には弧状の当て具痕が横方向に連続して残るが、下位は比較的丁寧にナデ消されている。体部外面は全面自然釉に覆われ調整痕は不明瞭であるものの、自然釉の薄い部分で観察する限りでは元来叩き痕を丁寧にナデ消しているものと思われる。口径11.3cm、復元腹部最大径27.2cmを測る。H4は今回の調査で所在が確認できなかった平瓶。『見島総合学術調査報告』第27図22をトレースし掲載した。ただし、図に付されたスケールを基に原寸を復元したため、法量においては実物と多少の誤差が生じるであろうことを断っておく。平底の底部から直線的に体部に立ち上がる器形であり、腹部はやや角をもって張り出している。体部上半が扁平化傾向にある個体であり、頸部は直立するようである。腹部長軸径は16.3cmを測る。報告書巻末に付された図版を見ると体部上半にカキ目が施されているように見えるが、断定できない。今後実物が発見された折には再実測を行い報告を行う所存である。

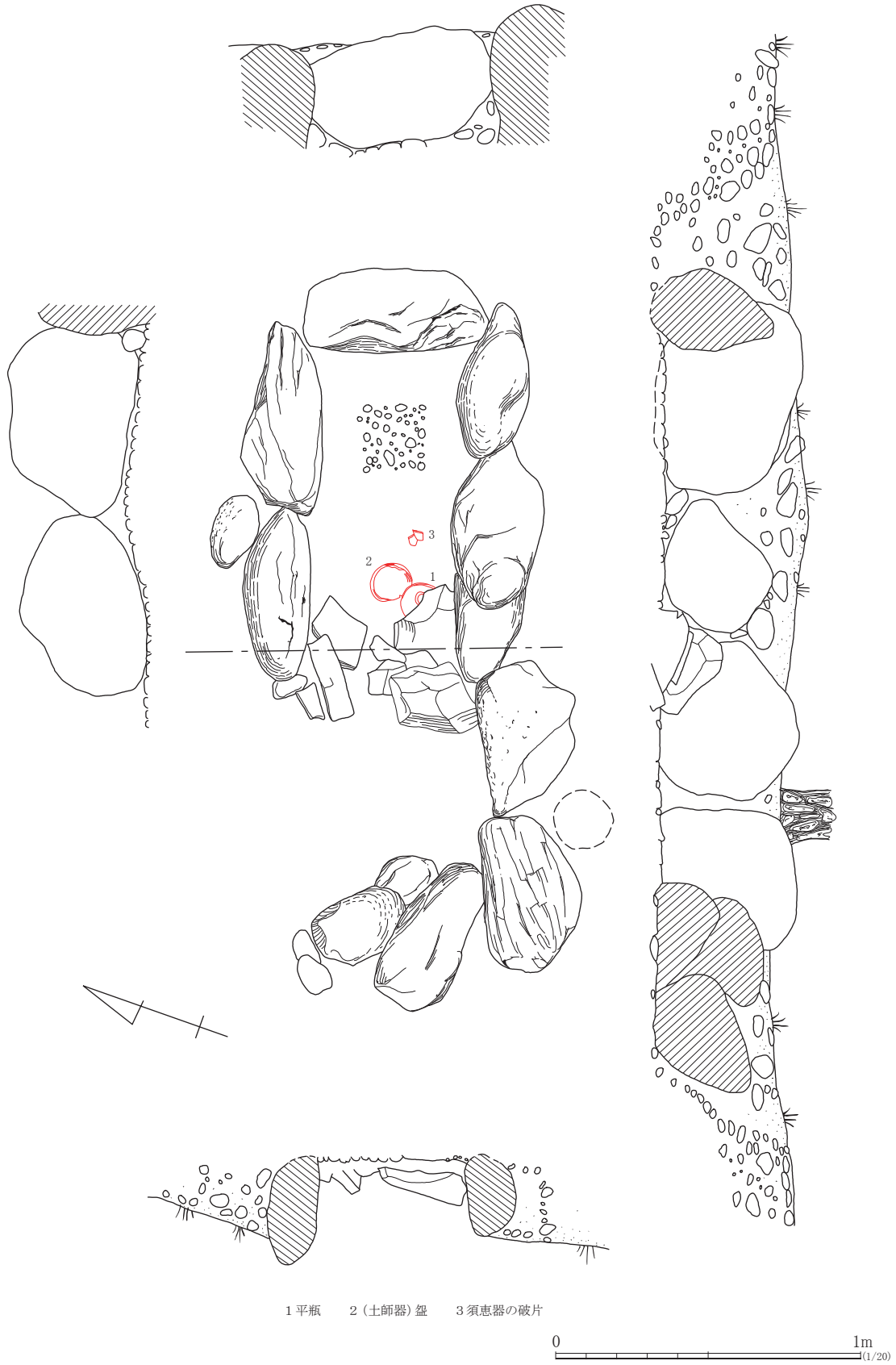


図17 第156号墳石室実測図

表8 第156号墳出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値 △は残存値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面 ②内面	胎土	焼成	備考
H1	第155号墳 床面	須恵器 坏蓋	天井部	③△2.0 つまみ径3.0 つまみ高1.4	①②灰白色(2.5Y8/2)	密	良好	『見島総合学術調査報告』第27図23掲載資料。 ほぼ扁平な天井頂部に球形に近い擬宝珠形つまみを付ける。
H2	第155号墳 床面	須恵器 甕	口縁部	①(26.7) ③△4.45	①黒褐色(2.5Y3/1) 暗灰黄色～オリーブ褐色 (2.5Y4/2～4/3) ②暗灰黄色～オリーブ褐色 (2.5Y4/2～4/3) 自然軸 にぶい黄褐色(10YR4/3)	密	良好	『見島総合学術調査報告』第27図20掲載資料。 外反する口縁上部に粘土紐を補充して二重口縁気味に口縁端部を形成する。口縁内端部を肥厚断面三角形に肥厚させる。端部から内面頸部にかけて自然軸が見られる。
H3	第155号墳	須恵器 短頸壺	口縁部 ～体部	①(11.3) ③△13.9	①灰オリーブ(5Y5/2) 自然軸 灰オリーブ～暗オリーブ (7.5Y4/2～5/2) ②灰白色(2.5Y7/1)	密	良好	『見島総合学術調査報告』第27図21掲載資料。 短く立ち上がる頸部を有し、口縁端部は面をとる。体部は肩が張らずほぼ球形に形成される。口縁端部から体部上位にかけて自然軸がかかる。体部内面には弧状の当て具痕が見られるが、外面に明確な叩き痕は見られない。
H5	第155号墳 床面	土師器 坏	ほぼ完形	①11.2 ③4.3	①にぶい褐色(7.5YR5/4) ～にぶい黄褐色(10YR5/4) ②にぶい黄褐色(10YR6/4)	やや粗	軟質	『見島総合学術調査報告』第27図24掲載資料。 丸底の底部から内湾して体部が立ち上がる。口縁端部は丸く収める。外面は全面に粗雑なミガキが施される。内面は指ナデ調整が行われるが、底面は渦巻き状に施されている。
H6	第155号墳 床面	土師器 坏	口縁部	③△2.25	①②にぶい黄褐色 (10YR4/3)	やや粗	やや軟	H5と別個体の土師器坏口縁部片。内外面とも回転ナデ調整が施される。

2. 土師器(図18、写真30、表8)

坏2点が確認された。

H5はほぼ完形の坏。丸底の底部から強く内湾して体部に立ち上がり口縁に至る。口縁端部は丸く収める。外面は倒置させた状態で左下→右上方向にミガキが施される。内面は指ナデ調整が行われるが、底面は渦巻き状に連続したナデが施されている。口径11.2cm、器高4.3cmを測る。H6は坏口縁部片。色調、胎土等からH5とは別個体である。他に同一個体の可能性がある体部片が1点存在する。体部から緩やかに内湾して口縁に至る器形と見られ、口縁端部は部分的に欠損しているが、尖り気味に丸く収めるものと推測される。内外面にはロクロ水引き成形によるものと思われる凹凸が見られるが、小片であるため断定できない。内外面とも横ナデもしくは回転ナデが施されている。

以上がこの度の資料調査で確認された第156号墳出土資料の全てである。当墳出土資料は、『見島総合学術調査報告』に図示された資料の一部と、それ以外のほぼ全資料が所在不明となっている。特に坏、坏蓋の不明は当墳の所属時期を特定する上で極めて深刻な障害となっている。今後も資料の追跡調査に努めるとともに、発見の場合には迅速に報告を行いたい。



図18 第156号墳出土土器実測図

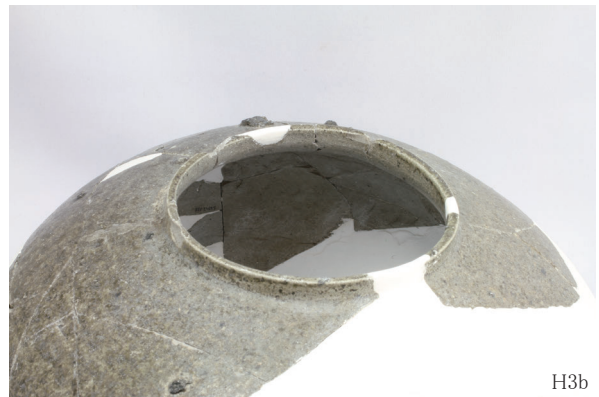


写真 30 第156号墳出土土器

第VI章 まとめ

平成24年度の見島ジーコンボ古墳群出土資料調査は、第152・153・155・156号墳の4基を対象に実施した。昭和35年から37年にかけて3ヶ年にわたり実施された見島総合学術調査では、18基(番外を含めると20基)の石室に調査の鍬が入れられた。一昨年度報告を行った第154号墳、昨年度報告を行った第151号墳に加え、これで6基分、約1/3の墳墓に対する出土資料調査をひとまず終えたことになる。当調査の目的は、埋蔵文化財資料館に所蔵される劣化著しい金属製品の保存処理を実施するとともに、萩博物館所蔵資料と合わせ出土品の悉皆調査を実施し、遺跡の評価を世に問うことにあるが、調査の過程で所在確認が行えなかった資料も膨大な量に上るため、今後も追跡調査を継続したい。ここでは今回確認できた資料のみが対象となるが、主な出土品や調査対象墳の初葬、追葬年代などに若干の考察を加え、まとめたい。

【第152号墳】

今回の調査墳の中では比較的豊富な資料が存在するが、遺物の遺存状態が悪く、所属時期を特定する資料は極めて乏しい。須恵器坏を見るとMJ152H2は細片であるが8世紀前半代のものである可能性を有し、MJ152H28は棺外出土品であるが8世紀後半、MJ152H29も同様に棺外出土品であるが9世紀の所産と見られる。須恵器坏蓋MJ152H1は扁平であるものの、ややアーチ状に天井部から口縁に降下する器形から8世紀中頃～後半のものであろうか。人骨が未出土であるため、埋葬体数も不明である。金属製品には、わずかであるが鉄鏃・刀子の副葬が見られる。

【第153号墳】

資料数が極めて乏しい。放射線状暗文が見られる土師器坏MJ153H4、口縁内端を肥厚させる土師器坏MJ153H5は8世紀代の所産か。銅鏡MJ153Hbr1も形状から8世紀代として違和感ないものである。人骨は未出土である。なお、奥壁と側石の構築方法から、石室はおそらく追葬時に改築が行われたものと推測される。

【第155号墳】

こちらも土器資料は乏しいが、須恵器坏蓋MJ155Y1はドーム状の天井部と擬宝珠形つまみの存在から、8世紀前半代のもものと見られる。同じく坏蓋MJ155H1は扁平化しつつも未だ器高が高く、口縁をしっかりと下降させる形態から8世紀中頃の所産と思われる。坏蓋MJ155H2は8世紀後半代、MJ155Y2は9世紀以降の所産であろう。青磁MJ155H5は越州窯産と見られ、当墳の副葬品と見なして良いものであれば10世紀代を下限としたい。人類学側の見地として、出土人骨鑑定から当墳には少なくとも4体が埋葬されたとされる。簡素な石棺形石室ながら、長期にわたる使用が推測される。金属製品には、直刀とそれに付随する鉄製鏢、銅製・鉄製の刀装具、刀子などが見られる。

【第156号墳】

所在不明の資料が多く、特に須恵器盖坏が未発見のため、埋葬時期の推定が困難である。その中でも、未発見資料ではあるが『見島総合学術調査報告』に図と写真が掲載されている須恵器平瓶MJ156H4はやや上半部が扁平化するものの比較的古い形態を残すもので、7世紀後半を中心に所属時期を推定したい。また須恵器甕口縁部MJ156H2は口縁端部の成形手法において防府市末田2号窯のものと類似することから、8世紀前半代に所属時期を求めたい。当墳も人骨は未出土であり、金属製品も出土した形跡が見られない。

最後に、この度の資料調査に着手する直前、長らく萩市の文化財保護業務に関わられた柏本朝子氏の訃報に接した。氏は見島ジーコンボ古墳群の資料整理を長きにわたり担当されていたと聞く。末筆ながらここに資料整理の多大なる労に対し感謝の意を表するとともに、心よりご冥福をお祈りする。

【文献】

- 1) 青島啓ほか(2011)『陶窯跡』山口市埋蔵文化財調査報告第70集, 山口市教育委員会文化財保護課(編), 山口
- 2) a: 池田善文(1993)「土器の基準資料と編年」, 池田善文(編)『長登銅山Ⅱ』美東町文化財調査報告第5集, 美祢(山口)
b: 池田善文(2004)「集成 須恵器」, 山口県(編)『山口県史』資料編考古2, 山口
- 3) 市来真澄(2011)「見島ジーコンボ古墳群の構築時期と石室について」, 海古墳を考える会(編)『海古墳を考えるⅠ—群集墳と海人集団—発表要旨』, 北九州(福岡)
- 4) 小田富士雄(1975)「萩の埋蔵文化財」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第32号, 萩(山口)
- 5) 国守進「中世の見島」, 萩市史編纂委員会(編)『萩市史』第2巻, 萩(山口)
- 6) 桑原邦彦・池田善文(1981)「防長地域の須恵器窯跡と編年研究」, 周陽考古学研究所(編)『山口県の土師器・須恵器—編年と集成—』周陽考古学研究所報3, 光(山口)
- 7) 斎藤忠・小野忠熙(1964)「考古の部」, 山口県教育委員会(編)『見島総合学術調査報告』, 山口
- 8) 俵教雄(1959)「第二部 沿革 第四編 古代」, 萩市誌編纂委員会(編)『萩市誌』, 萩(山口)
- 9) a: 中村徹也(1983)「[特別講演]ジーコンボ古墳群から見た見島(上)」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第45号, 萩(山口)
b: 中村徹也(1983)「[特別講演]ジーコンボ古墳群から見た見島(下)」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第46号, 萩(山口)
- 10) 中村徹也・国守進(1989)「原始・古代の見島」, 萩市史編纂委員会(編)『萩市史』第2巻, 萩(山口)
- 11) 乗安和二三(1983)『見島ジーコンボ古墳群』, 山口県教育委員会(編), 山口県埋蔵文化財調査報告第73集, 山口
- 12) 長谷川道隆(1975)「青磁にかくされた歴史—見島出土の唐末五代越州窯青磁片—」, 史都萩を愛する会(編)『史都萩』第33号, 萩(山口)
- 13) 匹田直・弘津史文・小川五郎・三宅宗悦・姉川從義(1927)「阿武郡見島文化の研究」, 山高郷土史研究会(編)『山高郷土史研究会考古学研究报告書—台覧紀年号—』, 山口
- 14) 松下孝幸・分部哲秋・佐熊正史(1983)「山口県萩市見島ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨」, 山口県教育委員会(編)『見島ジーコンボ古墳群』山口県埋蔵文化財調査報告第73集, 山口
- 15) 松下孝幸(1985)「山口県見島ジーコンボ古墳群の人骨—山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の資料—」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』, 山口
- 16) 三輪善之助(1923)「長門見島の遺跡」, 日本考古学会(編)『考古学雑誌』第14巻第3号, 東京
- 17) 山本博(1935)「長門国三島村の弥生式遺跡と古墳出土遺物—特に口帯について—」, 日本考古学会(編)『考古学雑誌』第25巻第8号, 東京
- 18) 横山成己(2011)『見島ジーコンボ古墳群 第154号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書1, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口
- 19) 横山成己・松浦暢昌(2012)『見島ジーコンボ古墳群 第151号墳出土資料調査報告』館蔵資料調査報告書2, 山口大学埋蔵文化財資料館(編), 山口
- 20) 横山成己(2012)「見島ジーコンボ古墳群「俘囚墓説」小考」, 「やまぐち学」推進プロジェクト(編)『やまぐち学の構築』第8号, 山口
- 21) 渡辺一雄ほか(1983)『生産遺跡分布調査報告書』山口県埋蔵文化財調査報告書第74集, 山口県教育委員会文化課・山口県埋蔵文化財センター(編), 山口

付篇1

山口県萩市ジーコンボ古墳群第155号墳出土の人骨

松下孝幸*・松下真実**

【キーワード】: 山口県、古代人骨、保存不良

はじめに

ジーコンボ古墳群は萩市見島字片尻(381-1、387-1)に所在する。見島は萩市の北北西約46.3kmの日本海上に浮かぶ孤島で、その大きさは東西は約2.5km、南北約4.6km、面積約7.8km²である。ジーコンボ古墳群は島の南東端にある礫浜堤に形成されている積石塚である。ジーコンボ古墳群の発掘調査は古くは1926(大正15)年に山口高等学校の歴史教室の人々によっておこなわれている(山口県教委、1964)。

山口県教育委員会は1960(昭和35)年度から3ヶ年に亘って見島総合学術調査を実施したが、ジーコンボ古墳群の発掘調査もこの時おこなわれ、1961(昭和36)年度には10基(123号墳、124号墳、128号墳、137号墳、151号墳、152号墳、153号墳、154号墳、155号墳、156号墳)、1962(昭和37)年度には8基(1号墳、44号墳、56号墳、57号墳、77号墳、81号墳、105号墳、116号墳)の発掘調査がおこなわれている。このうち1961年度に発掘調査がおこなわれた第123号墳と第155号墳出土人骨および151号墳から出土した人骨の一部についてはすでに報告した(松下、1985、松下・他、2012)。第123号墳からは1体分の、第155号分からは3体分の人骨(歯)が、151号墳からは5体分の遊離歯が検出されている。また、1982(昭和57)年7月には山口県教育委員会が3基の墳墓(第16号墳、第72号墳、第113号墳)の発掘調査を実施しており、3基からそれぞれ人骨が検出された。第16号墳と第113号墳からは1体分であったが、第72号墳からは3体分が出土した(松下・他、1983b)。

山口県内での奈良時代人骨は、ジーコンボ古墳群人骨以外には存在しない。平安時代人骨は、防府市の周防国府跡(松下、1984)、周東町の上久宗遺跡(松下、1995)の例があるが、後者は火葬骨である。

熊本市では、新幹線工事と区画整理事業に伴って、熊本駅周辺での発掘調査が進み、二本木遺跡群から平安時代に属する人骨が相次いで検出されている。これほどまとまって古代人骨が出土することは珍しいが、それは発掘調査範囲が広域に亘っていることや、官衙遺構が検出されるなど、古代においてこの地域が都市機能の中心地であったために厚葬される人たちが比較的多かったことによるものであろう。

第155号墳出土人骨については前述しているように既に報告したが、今回山口大学埋蔵文化財資料館から新たに同墳墓から出土した人骨がみつき、また、萩市博物館にも第155号墳から出土した人骨が保管してあることがわかったので、今回この2件の人骨について報告することにした。いずれも残存していた人骨は少量であるが、先に報告した人骨との関係なども考察してみたので、その結果を報告しておきたい。

* Takayuki MATSUSHITA、** Masami MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum [土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

資料および所見

今回報告する人骨と歯は、第155号墳から出土した人骨として山口大学埋蔵文化財資料館と萩市博物館に保管されていたものである。後者はビニール袋2つに入れてあり、いずれも「1961,9,2 155号墳、東半分」と記載されていた。石室内の東側から出土したということであるが、調査はこの東半分しか実施されていない。

まず、「見島総合学術調査報告」(1964年)にある第155号墳の記述から人骨に関係する部分を抜き出してみると「石室のほぼ中央部に、防風林として植林された樹令30年ぐらいの黒松が生えているので、発掘調査は石室の東半分しか行なうことができなかった。・・(略)・・外部から観察した奥行は約258センチ、幅約75～90センチで、床面からの高さは50センチを測り、遺骸の出土状態や、39箇の歯牙の形態と大きさや咬耗度などから、成人2体と幼児1体の少なくとも3体分の遺骸が埋葬された重葬墳であることがわかる。人骨は床面とその上に堆積した土礫層の中とにみられ、いずれも四肢骨片が水平位に遺存し、最初に埋葬されてから若干の時間を経過して次の遺骸を埋葬したことを示している。歯牙には、著しく磨耗した大形の臼歯と切歯や、若々しく盛り上がって磨耗していない大形の臼歯と切歯に、歯根が吸収された乳臼歯が混ざっており、これらが石室の北東部からまとまって出土したところからみると、3体の遺骸は頭部を奥壁側に置いて埋葬してあったようである。」とあり、被葬者を3体と推測している。副葬品としては、鉄製刀身、銅製の貴金具、鉄鏝、鉄製刀子、小銅環が出土している。

なお、本石室から出土した遺物から初葬は8世紀初めで、その後9・10世紀まで3回の追葬があったものと推測されている。後述しているように本石室からは4体分の人骨や歯が検出されている。それぞれの人骨や歯がどの時期の埋葬者の遺骨であるかは判別できないが、いずれにせよ本人骨は古代(奈良・平安時代)に属する人骨である。

表1 資料(Table 2. List of skeletons)

人骨番号など	残存部位
山口大学埋蔵文化財資料館保管人骨	下肢骨片のみ
萩市博物館保管人骨「A」	下顎骨片、永久歯、下肢骨片
「B」	頭蓋片、永久歯冠、四肢骨片

1. 山口大学埋蔵文化財資料館保管人骨

保管されていた人骨は1961(昭和36)年9月3日に取り上げられたものである。大腿骨体の破片のみである。

2. 萩市博物館保管人骨

人骨が入っていたビニール袋は2つあった。現状を保存するために、それぞれの袋に「A」「B」という記号を付けて処理した。いずれも1961年9月2日に取り上げられている。中に入っている人骨を解剖学的に精査してみた。それぞれの袋に入っていた人骨の部位などは次のとおりである。

《ビニール袋「A」の人骨》

「A」には成人の下顎骨の一部、未成人の岩様部、大腿骨などの下肢骨の破片、永久歯1本(下顎左側第二小臼歯)が入っていた。下顎骨は下顎底と歯槽部のごく一部である。永久歯は歯根部の先端部分を

破損した下顎左側第二小臼歯1本のみで、咬耗度はBrocaの1度(咬耗がエナメル質のみ)である。大腿骨は、骨体の一部が残存していた。

《ビニール袋「B」の人骨》

「B」には成人の頭蓋片、未成人の岩様部、永久歯冠5個、四肢骨片が入っていた。

頭蓋片はわずかで、骨壁はやや薄い。遊離歯冠が5点残存していた。すべて永久歯冠である。いずれも咬耗が認められないこと、歯根が形成途中であることを示す痕跡が認められることから、この5点の永久歯冠は同じ個体(未成人)の永久歯冠と思われる。その残存歯冠を歯式で示すと、次のとおりである。

$\begin{array}{cccccccc} / & 7 & / & / & / & / & / & 1 \\ \hline / & / & / & 5 & / & / & / & / \end{array}$	$\begin{array}{cccccccc} / & / & / & / & / & / & / & / \\ \hline / & / & / & 4 & 5 & / & / & / \end{array}$
---	---

〔●:歯槽閉鎖 ○:歯槽開存 /:不明 ▽:先天性欠損、番号は歯種〕

〔1:中切歯、2:側切歯、3:犬歯、4:第一小臼歯、5:第二小臼歯、6:第一大臼歯、7:第二大臼歯、8:第三大臼歯〕

歯冠にはいずれにも咬耗は認められない。歯冠の形成程度から6歳程度の小児の歯冠と推測した。四肢骨は大腿骨体の一部で、左右の区別もつかないほどの大きさである。

2つの袋に収められていた成人骨は、頭蓋と大腿骨などの四肢骨片および永久歯1本である。これらが同一個体であるかどうかは、残存部分が少なすぎて判別できない。未成人の側頭骨岩様部が「A」「B」それぞれに1点ずつ存在するが、大きさが違うので、これは別個体である。従って、未成人(幼小児骨)は2体分ということになる。

以前、第155号墳から出土した人骨として報告したのは、上腕骨1本(左、女性)、大腿骨3本(A:男性、右、B:女性、両側)、脛骨1本(性別不明、両側)と遊離歯5点であった。大腿骨が2体分(男女各1体)あり、萌出直後の大臼歯があることから、残存していたのは幼小児骨1体を含めた3体分の人骨と推測した。今回観察できた資料のうち成人骨は、頭蓋骨片、下顎骨片、四肢骨片のみで、以前報告した人骨の一部とみられる。また、「B」に入っていた永久歯冠も前回報告した幼小児の大臼歯と同一個体の可能性が強い。しかし、今回新たに未成人の岩様部2点がみつき、大きさが異なることから未成人は2体分存在する可能性がでてきた。従って、第155号墳から検出された人骨は、幼小児骨2体を含め4体分(男性:1、女性:1、幼小児:2)である。発掘報告書によれば歯は39個存在したことになるが、前回報告分の5点に今回の6点を加えても合計は11点にしかない。残りの歯がみつければ、より正確な被葬者の体数が明らかにできるものと思われる。

要 約

昭和36年度におこなわれた萩市見島にあるジーコンボ古墳群の発掘調査で、第155号墳から人骨片と歯が出土している。この資料の大部分はすでに報告したが、新たに山口大学埋蔵文化財資料館と萩市博物館から第155号墳出土人骨がみつかったので、人類学的観察などをおこない、以下の結果を得た。

1. 新たにみつかった山口大学埋蔵文化財資料館保管人骨は大腿骨体の破片のみである。
2. 萩市博物館保管人骨は、成人の頭蓋や下肢骨の骨片と遊離した永久臼歯で、成人骨は以前報告

した成人骨の一部の可能性が強い。以前報告した人骨は、未成人骨1体を含む3体分であったが、今回未成人骨が2体存在することがわかったので、第155号墳から検出された人骨や歯は未成人骨2体を含む4体分と推測される。

謝辞

《 擱筆するにあたり、本研究の機会を与えていただいた山口大学埋蔵文化財資料館ならびに萩博物館の皆様へ感謝致します。 》

《参考文献》

1. 松下孝幸・他、1983a山口県防府市玉祖遺跡出土の平安・中世人骨。玉祖遺跡・西小路遺跡(山口県埋蔵文化財調査報告70):147-148.
2. 松下孝幸・他、1983b:山口県萩市見島ジーコンボ古墳群出土の平安時代人骨。見島ジーコンボ古墳群(山口県埋蔵文化財調査報告73):32-36.
3. 松下孝幸・他、1984:防府市周防国府跡出土の平安時代人骨。防府市文化財調査年報VI:535-544.
4. 松下孝幸、1985:山口県見島ジーコンボ古墳群出土の人骨ー山口大学埋蔵文化財資料館所蔵の資料一。山口大学構内遺跡調査研究年報IV:83-90.
5. 松下孝幸、1995b:山口県周東町上久宗遺跡出土の火葬骨。山口県埋蔵文化財調査報告第174集:25-30.
6. 松下孝幸、他、2012:山口県萩市ジーコンボ古墳群出土の人骨。見島ジーコンボ古墳群第151号墳出土資料調査報告(館蔵資料調査研究報告書2):47-52.
7. 山口県教育委員会、1964:見島総合学術調査報告

付篇2

萩市見島ジーコンボ古墳群第155号墳出土金属製品の成分分析調査

(株)吉田生物研究所

1. はじめに

萩市見島に所在するジーコンボ古墳群第155号墳から出土した金属製品1点について、材質を明らかにする為に以下の通り成分分析を行った。その結果を報告する。

2. 資料

調査した資料は表1に示す金属製品1点である(写真1)。

表1 調査資料一覧

No.	遺物 No.	資料名	概要
1	MJ155Ybr1	金属製品	20×7mmの少し湾曲した小片。表面は鈍い銀灰色。緑青が見られる



写真1

3. 方法

資料を用いて蛍光X線分析を行い、金属元素を同定した。装置はRIGAKU製の波長分散型蛍光X線分析装置ZSX-PRIMUS IIを用いた。

4. 分析結果

成分分析結果のスペクトルを付す(図1)。表2に分析結果一覧を示すが、その数値はあくまで参考に過ぎない。また、Na～Feは土壌に由来する成分と思われる。調査資料は主成分として銅(Cu)が検出されており、銅製品である。微量成分の鉛(Pb)は銅の製錬過程で残留したものと考えられる。

表2 ジーコンボ古墳群155号墳の成分分析結果一覧表

元素	Na	Mg	Al	Si	P	S	Cl	K	Ca	Fe	Cu	Pb
No.1(wt%)	0.60	0.51	5.39	11.30	2.20	0.29	0.66	0.49	0.37	0.45	77.20	0.54

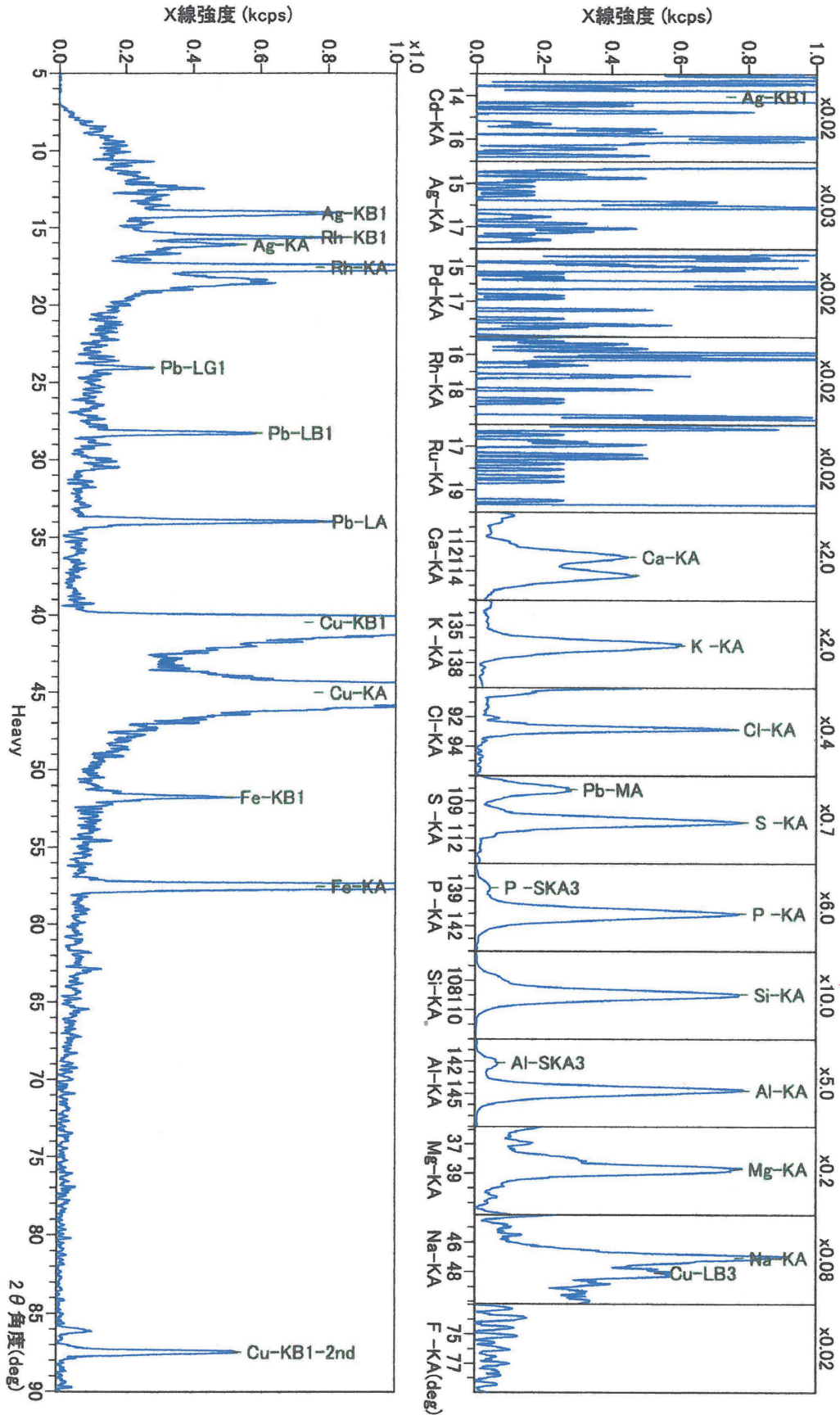


図1 No.1 金属製品 (遺物 NO.MJ155Ybr1)

館蔵資料調査研究報告書3

見島ジーコンボ古墳群

第152・153・155・156号墳出土資料調査報告

平成25年3月29日

編集 山口大学埋蔵文化財資料館

発行 山口大学

〒753-8511 山口市吉田1677-1

印刷 (有)三共印刷

〒759-0204 宇部市大字妻崎開作1953-8

